
Fate of Time ~ **運命の扉** ~

ごましお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate of Time 運命の扉

【Nコード】

N2918B

【作者名】

ごましお

【あらすじ】

世界滅亡を防ぐため生まれた三人の救世主の物語。滅亡間近の異世界に突然やってきた翔子は、地球に帰ることができるのか？世界を救う三人の救世主とは？変えられない運命をテーマにした物語。

序章

遙か昔、四人の神が存在していました。

大地の神メデスは大地を、水の神イデスは水を、生命の神サデスはたくさんの命を生みだし、一つの星を作りました。

もう一人の神、滅の神、滅びの神ラデスは魔獣を生みだします。

メデスとイデスは魔獣を封印しましたが、魔獣の膨大な魔力を完全に封印することはできず、魔獣は少しずつ少しずつ魔力を取り戻していきました……

1200年という年月をかけ、魔獣が蘇ることを知ったサデスは、1200年後に三人の使いを生みだしました。

ところがラデスは魔獣を蘇らせ世界を破滅へと導きたいが為、使いに呪いをかけ、別々の場所へと飛ばしてしまいました。

一人は欲深き者等のところへ……

もう一人は戦乱の地へ……

そしてもう一人は、今だ誰も見ぬ異にしえの地へ……

第1章「深い森の中で」

目の前が急に真っ白になったかと思うと、翔子は森の中に立っていた。

ここがどこだかわからず、前にどこにいたのか、どうやってここに来たのかさえも思い出せない。

森は太陽の光が注がない程深いので薄暗い。

翔子はふとカバンの中を見た。

携帯の電源が切れている。

ボタンを押しても電源は付かず、恐怖が翔子の脳をよぎった。食べる物も喉飴しか持つておらず、飲み物もない。

それに、近くに川や池がありそうにもない。

もしこの森から抜け出せなかったら、死んしまうのだろうか。

こんなところで死ぬのは誰だつてごめんだろう。

今はここを抜けるしかない。

翔子は草木がなるべく生い茂っていない場所（どこも茂っていたが）を選んで歩きだした。

地面は見えないほど草木や木の根があり、その地面はぬかるんでいて足を取られてしまうのでかなり歩きづらい。

都会に住む翔子にとってこんな歩きずらさは初めてだった。

なのですぐに疲れてしまい、木の根本に座って度々休憩をとりながら少しずつ少しずつ、どこまで続くかわからない道を進んでいった。

もうどのくらい歩いたのだろうか。

翔子の体力も限界にきていた。

気温もだんだん肌寒くなってくる。

だんだん木の葉の間からかすかに注いでいた光もなくなり、森は真っ暗になった。

夜になったのだ。

木の葉が遮り月の光も入らない。

暗くて何も見えないためドテツと鈍い音をたてて翔子は転び、木の根に膝を擦ってしまった。

「いったあ……」

おまけに鞆の中身が転がり落ちてしまった。
カチャツと何かが落ちる音がするとわずかな明かりが灯った。

携帯だ。

落ちた衝撃で携帯が開き、画面が光っていたのだ。

携帯の小さな光と目が慣れてきたことにより、翔子は徐々に周りの物が見えるようになってきた。

目をパチパチさせ、足元に気を付けゆっくりゆっくりと歩いて携帯を取りに向かった。

途中で木の根に何度かつまずきそうになったが、無事に携帯を取り、翔子はすぐ携帯を懐中電灯変わりにし、眠れそうな場所を探し始めた。

しかし、いくら明かりがあるとはいえ、月の光も注がない程真

つ暗な森を歩くのは危険すぎた。

この森には地面から根が付き出る程の大木が生い茂っていたため、携帯くらいの明かりでは視野が狭すぎてつまずいてしまっし、寝られるような場所など探していたらおそろく日が昇ってきてしまうだろう。

それに危険な生き物もいるかもしれない。

そこで翔子は登ることのできそうな、なるべく低い位置にも枝のある木を探し始めた。

さすがに木がたくさんあるだけに、一步も進むことなく、辺りを見回しただけで登れそうな木が見つかった。

その木は他の木よりも枝や幹も少し太く、側までいくと根も太く、翔子はこの木に登って眠ることに決めた。

登るのは暗い森を歩くよりもずっとたやすく、なるべく太く葉の多い枝を見付けて、もうずいぶん気温も冷えてきていたため、葉をたくさん固めて横になり、その上から更に葉で自分の体を覆って眠ることにした。

しかし、昼と夜とでは気温差が激しく、木の葉で夜の寒さをしのぐことはできそうになかった。

自分の息が白く見える程だった。

その時、背後から何かが動いたような音が聞こえた。茂みが揺れたような音だった。

翔子の体に恐怖感が走ったが、翔子は携帯を手にし、明かりを付け、木の上から背後の茂みを除いた。

三人の人の顔が見えた。

明らかに三人とも日本人ではなかった。

一人は瞳は透き通った蒼で、薄茶色の髪をした細身青年だった。瞳はとても綺麗で顔立ちもよいのだが、髪はボサボサで、顔も汚れていた。

もう一人はその青年とは対照的で、長髪で綺麗なブロンドの女性だった。

その女性は小さな女の子を抱いていて、女の子は頭だけが茂みから出ていて顔は見えなかった。

細身の青年とブロンドの女性が何か話していた。

「○▲×□……」

「■×！」

二人は日本語でも英語でもない、翔子の知らない言葉で話していた。

細身の青年は低い声でささやくように、ブロンドの女性は焦った様子で、脅えたような声だった。

女の子は泣いていた。

そして、細身の青年は何かを構えたかと思うと、大きな音が二度響きわたり、森の静けさを消しさり、ブロンドの女性と女の子が倒れるのが見えた。

ブロンドの女性が持っていた松明が茂みに燃え移った。

翔子は大変なものを見てしまったことに気が付き、早くここから離うとしたが、恐怖で体が動かなかった…。

翔子の集めた木の葉の数枚が、ヒラヒラと細身の青年の方へ落ちていき、青年の頬をかすめた。

青年は木の葉を一枚拾うと、木の葉の落ちてきた方向を見上げた。

翔子と細身の青年の目があった。

翔子はなんとか立ち上がって逃げようとした時、さっきと同じ銃声が聞こえた。

その時、翔子は今までに感じたことのない痛みが翔子の全身を走った。

そして木から落ち、体は地面に叩き付けられた……

「異世界」

翔子は夢を見ていた。

長い白髪で、白いローブを着た女性が透き通った声で何度も同じことを言っている。

「時が来た。ルイス〓マリアルとジョイス〓オッドリアを探しなさい。」

翔子はあまり夢を見ることはなく、見ても起きたら忘れている事が多いのだが、この夢は何度も見るので、よく覚えていた。

白い女性の声はだんだん小さくなっていき、今度はピチャツと水が飛んだような音が聞こえてきた。

翔子はうつすらと目を開けると、そこに見えたのは暗い森の木ではなく、明るい木製の天で、横を見ると肩に少し付く程の綺麗でサラサラな黒髪に漆黒の瞳、茶色く膝まである、大きなパーカーのようなものを着た、おそらく二十代前半辺りの女性が、翔子が寝ている横に座って、木製のバケツに汲んである水でタオルを濡らしていた。

その女性はそのタオルを翔子の額に乗せようとした時、翔子が起きたことに気が付き、なめらかな明るい口調で翔子に話しかけた。

「○×■「？」

その女性の声は、森で会った細身の青年やブロンドの女性とは敵

意や脅えは全くなかったが、
発音は似ていた。

それに、何か翔子に問掛けているようだ。
翔子は何を言っているのかサッパリ理解できなかった。

「私の言葉わかります？」

おそらく通じないであろうこと前提で翔子は女性に訪ねた。

「……」

沈黙になった……。

女性は首を傾げ、困った顔をしていたが、しばらくすると大きな
茶色い色リユックから、小さな瓶を取り出した。

コルクでフタをされ、中に銀色に輝いた、とても綺麗な液体が
入っていた。

すると、それを翔子の顔の上に一滴垂らし、液体は翔子の鼻の上
に落ちる寸前の所で跳ねて消えた。

翔子は鼻に手をやったが、濡れた跡も残っていなかった。

「魔法の薬は効きました？」

女性が言った。

言葉が聞き取れた。

たった一滴、薬を垂らしただけで。

しかもその薬は落ちる前に消えてしまったのに。

変わった服装といい、やることいい、翔子はこの女性に恐怖を感

じた。

言葉も森で会った人達と似ていた。

自分も殺されてしまうのではないかと……

「私はあなたに危害は加えません。」

女性が翔子の心の中を見透かしているかのように言った。

「私はシャルナ＝カーレラ。旅の者です。あなたが森で倒れていた
ので、ここまで連れて参りました。驚かせてしまつて申し訳ありま
せん」

女性は丁寧にそう言つと翔子に頭を下げた。

翔子は自分を助け出してくれたシャルナを、悪人だと少しでも思
つてしまったことを悪く思い、こちらも申し訳なさそうに言った。

「あたしは、加藤……いや、ショウコ＝カトウです。助けてくれてあ
りがとうございます」

「ショウコさん……珍しいお名前です。どこの出身の方ですか？」

「日本です。シャルナさんはどこの？」

「ここから遙か南、ウェリントンです。ニホンとは、聞いたことが
ないですね」

「あたしもウェリントンは知らないですよ」

「ウェリントンは人間界最大の先進街です。存じないとは、ニホン
はとても遠いところにあるのですか？」

「……」

翔子は何と返せば良いのかわからなかった。
それに女性は『人間界』と言っていた。他にどんな世界があるのだろうか。

翔子の頭の中で、今度は別の不安がよぎった。

もしかしたら、ここは違う世界なのでは？

という不安が。

でもそんな物語の世界だけだ。あるわけがない。
なのにそんなことを考えてしまう自分をすこし恥ずかしく思ったが、翔子は自分の思っていることが本当ではないことを心の中で信じながら口を開いた。

「ここは何という街ですか？」

「これまたご存じないとは。農業が盛んなカスター村です。神国や魔国にも野菜を輸入している、オルタス星一番の農業国ですよ。」

翔子の顔色が真っ青になった。

オルタス星……神国…魔国…ありえない…

翔子の予感は的中した。

ウェリントンやカスターなどという街も地球上には存在しない。いくら勉強が苦手な翔子もそのくらいはわかる。

それにさっきシャルナが銀色の液体を翔子にかけた途端、言葉が

通じた。

この人も絶対普通じゃない。

また翔子の心を読んでいるかのように、シャルナが言った。

「シヨークさんは、どうやら違う惑星からおみえになられたようですね。それに自分の意志でここに来られたわけではないようです」

「私は地球に住んでいます」

自分の人生の中でこんなことを言うなんて考えたこともないので、翔子はおかしく思った。

だが、比べてシャルナは全く動じていない様子で、落ち着いた口調で言った。

「地球…耳にしたことがあります。銀河系にある星で、太陽と月という星の光を浴び、蒼く、生命多用な美しい惑星だと」

「まあ……そうだけど……」

翔子はますます困惑した。

これ以上話していたら、頭がおかしくなりそうだ。

「突然こんな話をしても、困惑してしまうと思います。ですが、シヨークさんがいらした森は、普通では入らない……いや、入れない森です。何故そのような場所にいらしたのか、覚えていらっしやらないのですか？」

「……わかんない。気が付いたら突然あの場所にいたから……」

翔子はますますわけがわからなくなってきた。

「ここに来るまで、何をしていらしたかは覚えていらっしやいますか？」

「うーん……」

木から落ちたショックだろうか、思い出せない。思い出そうとすればする程、頭が酷く痛んだ。

「ごめんなさい。今はわかんないよ。頭が痛くて……」

「今は体を治す事に専念した方がよろしいです。腹部に銃で撃たれた跡もありました。まだ弾が体に残っています。私は応急処置をしままでですので、早く取らないと危険です」

翔子は自分の腹部を見た。包帯が巻かれ、血がにじんでいた。

「こここの宿屋の女将さんに伺ったのですが、サンクルナという村に、ハリー・クリアスという、腕の良いお医者様がおられるようです。その村にいつて診て頂きましょう。それまでお供いたします」

シャルナはそう言うと、翔子に軽くひざまずいた。

翔子はシャルナの丁寧すぎる態度に驚きを隠せない。

「そ、そこまでしなくて良いですよ。それに、歩けそうにないし……」

起き上がろうとしただけで、撃たれた傷跡に痛みが走った。

「無理をなさつてはいけません。今はもう夜なので、明日馬車を手配しましょう」

馬車とは……

どうやらここはあまり発展していないようだ。翔子はシャルナに聞きたいことが山ほどある。

違う星に同じような人間がいるのも不思議だし、銀色の薬について、この世界について、

なりよりこれは夢なのか、信じたくないが、そうでないのか。そうでないなら、どうやって帰れるのか？

だが、翔子はこれは夢だと信じきっていた。

普通誰でもこんなことになったら、こんなに落ち着いてはいられないだろう。

翔子は頭の中はごちゃごちゃだったが、違う世界に来てしまったことだけは理解していた。

絶対にありえないので、夢でしかない。

それに翔子はとても怖がりで、小さな地震が来ただけで、しばらく机の下から出てこないくらいなのに、別の世界に来て、襲われたというのに普通に話せるし、シャルナを信用しようという気持ちさえ生まれていた。

「シャルナさんは、あたしがどうしてここに来たか、心辺りがあるの？」

「ありません。ですが、なぜあの森にいらしたのかは気になりますね」

シャルナは少し真剣な口調になった。

「さっき普通じゃ入れないってゆってたけど、何でなの？」

「聖域の森なのです。正しい道を進まないと迷ってしまいます。見張りの兵士もいます。シヨーコさんのいらした場所は、道を知る人しかいけない場所でした」

「じゃあ、あたしを襲った人と、あたしを襲う前に撃たれた人達は道を知る者って事？」

「シヨーコさんの前に撃たれた人達とは？」

「親子っぽかった。女性と女の子。多分あたしが撃たれたのは、その人達が撃たれるのを見たから。その人達倒れてなかったの？」

「見辺りませんでした。血痕がありました。恐らく、連れ去られたか、可能性は低いですが、生きていてその場を去ったかです。」

シャルナは推理ドラマの刑事のように、脅える様子もなく冷静に話している。

一方、翔子はだんだんあの森での出来事を思い出し、身体中が震え始めた。

声もだんだん震えて来る。

「シャルナさんは…何でその森にいたの…？ 道を知らなきゃ…迷っちゃうんでしょ…？」

「森の入り口には何人か見張りの兵士がいます。偶然森の側を通りかかった時、兵士達が倒れているを見ました。何かあったのかと思ひ、森に入りました。森の中の見張りも倒れていて、その血を辿

っていったら、ショークさんを見付けました。見張りの方は全員亡くなっていたのですが、ショークさんは息があつたので連れて参りました。」

「そんな危険な森に…一人で入ったんですか?!」

「旅に危険は付きものです。それに傷付いた人を放つてはおけません。ショークさん、傷が痛むのなら、無理にお話なさらない方がよいです。不安なお気持ちはお察しますが、無理をすれば傷が悪化してしまいます。詳しいことは明日お話しいたしますから。」

シャルナは翔子が口に出さなくても、翔子の気持ちを讀んでいる。意外と冷静な自分と、何でも冷静なシャルナが翔子は怖かった。シャルナは悪い人ではなさそうだ。この人を信じたい。

だが、明日まで待てそうにない。

知りたいことがたくさんある。
早く夢から覚めて欲しい……

「細身の青年」

眠れない…

いや、眠れるはずがない。

こんな状況に陥って、スヤスヤ眠れる人などいるわけない。

いや…、目の前にいた。

シャルナは、

「何かございましたら、ご遠慮なくお申し付け下さい。」

と言って寝てしまった。傷口が痛み出してきた。

あの森に来てからどれ程経ったのかはわからないが、まだまだ夢から覚めなさそうだ。

「眠れませんか？」

横から突然、シャルナの声がした。

「起きてたの？」

「はい。シヨーコさんに何かあつては大変ですから。それにそろそろ薬が切れる時間なので」

シャルナは、リュックから今度は白い粉の入った瓶と、水の入った大きな瓶を取りだし、白い粉を小さな紙に少し出すと、水と一緒に翔子に差し出した。

「これをお飲み下さい。傷に効く薬です」

「ありがとう」

翔子は薬と水を受けとると、そつと薬を口に入れた。

「ううっ!!」

薬はとてつもなく苦く、忙いで水で流し込んだ。

「こんなん飲めないよ」

「速効性抜群の魔法の薬です。飲めばすぐに痛みが退きますよ」

魔法…やはりシャルナは普通ではないようだ。

翔子はこの世界が、自分の世界とは遥かに現実離れしていることだけは理解できた。

「さっきの銀色の魔法の薬？」

「はい。銀色の薬はどんな相手の言葉でも通じるようにできる薬です。シヨークさんは私の知らない言語で話してらしたので」

「シャルナさんは魔法使いなの？」

今度は普通に質問することができた。

「おや、私のことは少しは理解なされたようですね。私は魔法使いに近い、かもしれませんが、魔法使いではありませんね」

「じゃあ、何？」

翔子はシャルナを質問攻めにするつもりだ。

「最初に話したよう旅人です。目的も話さないとまた質問されそうですね」

「シャルナさんもあたしの事わかってきてんじゃん」

翔子は笑顔で言った。

シャルナは翔子に理解してもらえたことを嬉しく思い、シャルナの顔からも笑顔が溢れた。

「少し話して、相手の目を見れば、大体どのような方わかります。私は、捨て子だったのを今の両親に拾われました。産みの親を探す為に旅をしています」

翔子も同じだった。

翔子も産みの親を知らなかった。

シャルナとはお互い理解しあえる気がして、嬉しく思った。

「あたしも産みの親を知らないの。養子だったから」

翔子がそう言い終えた時、朗らかになりかけた空気に、またも緊張が走るようになった。

「キャー！！」

という悲鳴と共に、一階からバンっと言う銃声が聞こえたのだ。翔子はまた森での出来事を思い出してしまった。

「シャルナさん、あたし怖いよお」

翔子の目から涙が溢れだした。

シャルナは真剣な表情になった。

「無理かもしれませんが、落ち着いて下さい。私が必ず翔子さんをお守りいたします。」

シャルナはそう言うと、リュックから今度は小さな瓶に入った、透明な液体を取りだし、翔子に差し出した。

「今すぐにそれを飲みほして下さい。しばらく姿が見えなくなりま
す。私は下を見ているので、誰が来てもドアは絶対に開けず、じっ
としていて下さい。」

こんな緊急事態でも、シャルナはとても冷静だった。

危険な出来事を、何度もくぐり抜けているのだろうか。

翔子はシャルナにも透明薬を飲んでもらいたかった。

シャルナを危険なめにあわせて、自分だけ隠れているのが嫌だった。

「でも、シャルナさん危ないよ」

「ご心配ありがとうございます。ですが、私はちょっとやさつこの
事で死にはしませんよ」

シャルナは自信ありげにそう言うと、部屋の扉をそつと開けた。
扉は、キキつと古めかしい音をたてた。

そのあいだに、翔子は透明薬を飲み干した。

すると、翔子の体がだんだん透け始め、すぐに見えなくなつた。

シャルナは足音を潜めて、一階までの三十段程ある階段を降りていった。

十段くらい降りたところで三人の男性が身を潜めていた。ここに泊まっている人達のような。

真ん中に屈んでいたスキンヘッドの男性が、シャルナに気が付いた。

「おい、姉ちゃん。ヤバイことになってるぜ。あれ見てみな」

スキンヘッドの男性は小声でそう言うと、一階の方を指差した。その方を見てみると、一階のカウンターが見えた。

一人の女性が血を流して倒れていた。

そして、そのすぐ横で脅えた顔をした女将さんが立っていた。

薄茶色のボサボサの髪、つぎはぎだらけのボロボロのオーバーオールを着た、細身の青年が、女将さんの頭に銃をつきつけていたからだ。

細身の青年は低く冷たい声で言った。

「怪我をした女と黒髪の女が泊まっていないかと言っているんだ。この女のようになくなったら質問に答えるんだな。」

女将さんは倒れた女性を見てから、震えた声で言った。

「二階の…右側の奥から…二番目の部屋だよ…どうか…どうか、命だけは助けておくれやし」

「もうあんたは用無しさ」

細身の青年はそう言って、ためらうことなく引金を引いた。またも銃声が響き渡り、女将さんは後ろに倒れた。階段に屈んだ三人の男性の顔が真っ青になった。

「や、やべえぜ…アイツが言ってたのあんたらの事だろ？」

今度は左側の長髪の男性がシャルナに向かって言った。

「どうやらそのようね…」

シャルナは相変わらず落ち着いていたが、冷静だった表情は少し深刻になった。

「意外と冷静なのな。どうせここにいたら俺らも見つかる。あんたはお仲間連れて逃げな」

スキンヘッドの男性はそう言って、ポケットからナイフを取り出した。

シャルナは大急ぎで部屋に戻った。

廊下から三発の銃声が聞こえた。

階段にいた男性が撃たれたのだ。

部屋の窓は割れ、ベットの上の布団がぐしゃぐしゃになっていた。

……翔子はいない。

窓から外に出ようとしたのか、それとも窓から何者かに連れ去られたのか。

しかし、誰かが入った痕跡はない。

シャルナは窓に近付き、外を見ようとした時、

「動くな…」

低く冷たい声がした。

シャルナが振り向くと、部屋のドアの前にさっきの細身の青年が、銃を構えて立っていた。

「何の用ですか？」

落ち着いた口調でシャルナが言った。

緊迫した空気が部屋中を包んでいた。

シャルナはゆっくり振り向くと、真っ直ぐに細身の青年を見た。

お互い一切隙を見せず、向き合ったまま、視線をそらさなかった。

「両手を挙げて五歩進め」

相変わらず冷たい声で細身の青年が言う。

シャルナは言われた通りに両手を挙げて、細身の青年の方へ五歩進んだ。

細身の青年も数歩シャルナに近付いて、シャルナの胸に銃口を突き付けた。

「もう一人は？」

細身の青年が言った。

シャルナは冷静ではあったが、翔子が無事かどうか気がかかっていた。

「存じません。なんのことでしょうか？」

宿中の人が撃たれ、自分も銃をつきつけられ、今にも撃たれそうな状況だが、シャルナは冷静に質問した。

「ごまかしても無駄だ。目撃者もいる。」

シャルナのこれから話そうとしたことがあたかも嘘だと決めつけているかのように細身の青年は言った。

初めからシャルナに話を聞くつもりなどなかった。

だから宿中の人を撃ったのだ。

「ここにはいませんよ。ご覧になればわかることでしょう」

シャルナはそのことを気付いていたが、今焦ってもどうにもなりそうにない。

「どこへ逃がした？」

「逃がしてなどおりません。ここに泊まっているのは私だけです。」

細身の青年は部屋を見渡した。

確かにベットも一つ、椅子も一つだった。

だが、細身の青年は、窓が割れていることに気が付いた。

部屋に戻ってすぐに細身の青年が現れたので、カモフラージュする時間など尚更ない。

「後ろの窓ガラスは何だ？」

「あなたから逃げる為に割りました」

取り乱した様子一つなくシャルナが言い終わった時、

部屋中に銃声が響き渡り、シャルナの右肩から血が流れる。

しかし、シャルナは痛そうな顔もせず、倒れることなく立っている。

「随分冷静だな。だが、それもここまでだ。人間とはとてももう生き物だ。死への恐怖と苦痛にたえられなくなった時、必ず真実を話すことになる。」

細身の青年は笑みを浮かべそう言つと、今度はシャルナの右脚を撃った。

シャルナの脚から流れる血を見ながら、細身の男性は気味悪く微笑んでいる。

「まだ倒れないのか。だが、もうこの宿屋の中にいるのは俺とお前だけだ。助けは来ない」

細身の青年は自分の思つたばざとでもいうように誇らしげに言つた。

だが、シャルナは怖いものなどないかの様に平然としている。

「残念ですが、私は死への恐怖も苦痛にたえられないこともあります」

せん」

シャルナの表情からは言葉どうり、脅えた様子も、苦痛も感じられなかった。

細身の青年は少し戸惑いがあったように感じられたが、浅く溜め息をついて言った。

「あんたみたいに図太い人はたまにいるが、そんなことでは見逃がさない」

細身の青年は薄気味悪く笑うと銃口をシャルナの額に移した。

「ここを撃たれたら、流石に立つてはいられまい……」

細身の青年は引金を今にも引きそうなくらいに握っている。

だが、シャルナは翔子のことを話す気は全くなく、目をつぶって一呼吸置いた。

「あなたは何故その女性を探してらっしゃるのですか？」

「答えたら居場所を言うのか？」

「私は存じません。それに、あなたはどちらにしても、私を撃つおつもりでしょう。私には、あなたはまだこのような経験がお浅い様に見えます。不安な気持ちを隠していますね。それに、私から何か聞き出したいのなら、人質の一人や二人は捕っておくべきですよ」

シャルナは翔子だけでなく、この細身の青年の心も見抜いていた。

「それは……あんたに言われることじゃないっ！」

細身の青年は動揺した。

さっきまでの殺気立った顔とは違い、焦りが伺えた。

シャルナが今まで自分が撃ってきた人々とは違うとわかったよう
だ。

逆に自分が殺されてしまうのではないかとまで思った。

シャルナは細身の青年が動揺した隙を狙って、撃たれていない方
の手で思いつき、細身の青年の銃を弾いた。

銃は青年の手から飛びあがり、その振動で暴発し、玉は後ろの壁
を突き抜けた。

すると、二人しかいないはずの部屋で、もう一人の男の声がした。

「おっと、危ない。だが、そろそろ潮時のようだ」

「謎の男」

洪くて低めの男性の声だ。

丁度壁に穴が空いた近くで、真っ黒な竜巻が起こる。

その強風により、部屋中の物が飛び散った。シャルナも細身の青年も、お互いが見えない程だった。

真っ黒な竜巻がだんだん収まっていくと、さっきの声の人であるう、床に付く程の真っ黒なマントに身を包んだ男が現れた。

背はすらっとし高く、表情はあまりないが細身の青年よりはりりしく、歳は20代後半程の謎に満ちた男だった。

左手に何か抱きかかえているようだが、マントに包まれていて何かはわからない。

「もう此処に用はあるまい」

マントの男は言った。

やはり、さっきの声と同じだった。

「だ、ダーカス様！」

細身の青年は更に脅えた顔になった。

マントの男はどうやら細身の青年の仲間のようだ。

細身の青年の態度からして、この青年の雇い主のようだった。

だが、この男がわざわざ人を雇わなくても、このくらいお安い誤用だろうとシャルナは思っていた。

さっき起こした竜巻は、おそらく転移魔法だろう。

これは、かなりの魔法技術を使うため、魔法に相当長けていないてはならないことをシャルナは知っていた。

翔子を見つめるだけなら、彼一人で十分なはずだろう。

しかし、何故翔子を狙っているのだろうか。

ダーカスは紅い瞳をシャルナに向けた。

彼の瞳も、シャルナと同じく、人の心を見透かす様な瞳で、シャルナの心意を探っている様だ。

同じくシャルナも目をそらさず、黙ってダーカスを見た。かなり警戒し、隙を見せようとはしない。

「あなたは嘘は言っていない。」

ダーカスはシャルナに向かってそう言った。

どうやら危害を加える気はないようだが、シャルナは気を緩めようとはしなかった。

一瞬の気の緩みが危険に繋がることを知っていたからだ。

ダーカスは、視線を細身の青年の方へ移した。

「何故勝手な行動に出た？」

細身の青年はうつ向き、ダーカスと顔を合わせないようにしたまま、何も答えず脅えていた。

さっきシャルナに銃を向けていた時とは大違いだ。

一方、ダーカスは細身の青年を直視したまま言った。

「その女の言うとうり、お前はまだ慣れていない。勝手な行動は控

えることだ。それにこんなに人を殺して何になる？結局何もわからなかったではないか。これだから人間という生き物は…」

ダーカスは少し怒っている様だった。

細身の青年はますます体の震えが増していった。

どうやらダーカスは人間ではないようだ。

転移魔法から感じられた凄まじい魔力と、真っ赤な瞳から、ダーカスは魔族だろう。

「あなた…魔族の方？」

細身の青年より先にシャルナが口を開いた。

ダーカスは視線をまたシャルナに向けて、今度は軽く微笑みを浮かべていた。

「人間のわりに感が鋭いな。私は魔族のダーカスⅡベガという。」

ダーカスは丁寧にそう言って、シャルナに軽く頭を下げた。
そして

「この女性はあなたの仲間ではないのか？」

と言ってマントを広げると、ダーカスの片手に翔子が抱えられていた。

ぐったりして意識を失っている様で、顔や服のあちこちが土や砂で汚れていた。

シャルナはダーカスが翔子に何かしたのだと思い、ダーカスを睨み付けた。

「私は何もしていない。この少女は窓から逃げようとして、自分で足を滑らせたのだ。」

ダーカスは動じることなく言った。

シャルナの顔がますますきつくなった。

「あなた、見ていたのですか？」

「あなたが部屋から出る辺りから見ていた。」

シャルナはダーカスがすぐ近くにいたことに気が付かなかった。ダーカスは魔法で気配を絶っていたのだった。

それに気が付かなかったシャルナにますます緊張が走る。

それからダーカスはベッドの上に翔子を寝かせ、両手を掲げた。すると、辺り一面金色の光に輝いた。普通なら驚きを隠すことはできないはずだが、シャルナは一步も隙を伺わせる気配すらみせず、ダーカスと翔子を見ていた。

一方、細身の青年は目をまんまるにして、辺りを見回していた。まるで美しいこの空間の中へ吸い込まれていくようだった。

だが、そんな美しい風景は長く続かず、数分もしないうちに、ずっと光は消えていった。

だが、光がやんだ後の部屋の風景は違っていた。割れていた窓は元通りになっていて、銃弾で空いた壁の穴も塞がっていた。

始めてシャルナの表情が変わった。

だが撃たれた傷は跡形もなく消えていた。

シャルナは翔子が異世界から来たと知った時はあまり驚いていなかったが、今回は驚きを隠しきれないようだった。

シャルナは少し丸くなった目をダーカスに向けて言った。

「あなたはいつたい…」

ダーカスの口が笑い、ダーカスはシャルナの言葉を遮った。

「あの呪文を知っているのか？」

シャルナはこくりと頷いて言った。

「あなたは死者を消し去り、翔子さんと私の傷を治しましたね」

「傷を治したのはともかく、死者を消し去った事に気が付いたのは対したものだ」

ダーカスはそう言いながらマントを巻き直した。

「さあ、行こうか」

ダーカスは視線をシャルナから細身の青年に移した。

細身の青年は何が起こったのか全くわからない様子で戸惑っていた。

ゆっくり顔を上げ、戸惑った口調で細身の青年は言った。

「何もせずに帰るのですか？」

ダーカスは細身の青年へゆっくりと近付きながら答えた。

「新しい実験台が見付かったのだ。この翔子という女性はほつておいても問題はない」

細身の青年はダーカスの言葉には関心できなかった。
翔子を捕え、どうしても手柄をたてたいのだった。

「では、この女性は何？」

細身の青年はおそろおそろシャルナへ視線を向けた。
ダーカスは細身の青年の隣に立つと、シャルナへ視線を向けて言った。

「お前はあの女性を殺すことはできない」

細身の青年は内心わかつてはいたことだったが、人に言われるとそれは余計に悔しく、軽くうつ向き目を細めた。

「まあ、そうがっかりするな。新しい実験台が見付かった。お前があの森で撃った親子だ」

ダーカスは全く感情を込めずに言った。
細身の青年には関心がなさそうだった。

ふと、シャルナは翔子の言葉を思い出した。
翔子は森で撃たれた親子を見て、撃たれたと言っていた。
おそらく、この細身の青年が撃ったのだらう。

「それなら戻るべきです。」

細身の青年はさっきのダーカスの言葉で安心したのか、ゆっくりした口調ではあったが、前ほど戸惑いは感じられなかった。

ダーカスは両手でマントを広げた。

ダーカスが現れた時と同じ、黒い竜巻が起こり、部屋中の物が中に舞い上がった。

シャルナは視界を遮られ、とても目を開いていられる状況ではなくなつた。

シャルナは屈んで腕で顔を覆つた。

「穏やかな村」

カーテンの隙間から、朝日が注ぎ込んだ。
空は雲ひとつない快晴だった。

静かな部屋に小鳥達の鳴き声が響き渡る。
まるで昨夜の出来事などなかったかのように。

竜巻が収まった後は、部屋中の小物は全て床に飛び散っていた。
シャルナは床に倒れ、翔子はベッドで寝たままだった。

翔子はうつすらと目を開けた。
シャルナに助けられた時と同じ木製の天井が見えた。

もう、傷の痛みはない。

翔子は撃たれた腹部を手で押さえた。
触っても痛みはなく、翔子はゆっくり起き上がって、撃たれた腹部を見た。

夜見たとうり、包帯には血が染みていたが、血は既に乾いていて、
茶色っぽく変色していた。

翔子は包帯をそとはずした。翔子の白い綺麗な肌が現れ、撃たれた傷は跡形もなくなっていた。

翔子は外した包帯を枕元に置いて、ベッドから降りようとした時、
ベッドの足元に花瓶が割れ、花が飛び散っているのが目に入った。
不審に思い顔を上げると、まるで嵐でもやって来たのかというくらい、
床に物が飛び散っていた。

翔子は昨夜の出来事を思い出した。

銃声が聞こえ、シャルナが様子を見に部屋を出て、自分は魔法の薬で姿を消したこと。

シャルナが戻ってくるのを待てず、怖くなって窓から逃げようとして転落したこと。

そこから翔子の記憶はない。

翔子はシャルナが戻ってきて、助けてくれたのだと思った。

もし、シャルナが戻っていなければ、自分は今生きていないだろうと思ったからだった。

しかし、シャルナはどこに行ったのだろうか。

翔子はシャルナを探しに部屋を出ようとした。

もう歩いてもうっちらだ。

翔子は散らかっているものを踏まないように慎重に歩いていくと、さつきまで死角で見えなかったドアの付近が見えた。

「シャ、シャルナさん!!」

ドアの手前にはシャルナがうつ伏せになって倒れていた。

翔子は駆け足でシャルナに近寄り、肩を揺すった。

「シャルナさんっ！シャルナさぁーん！」

翔子の勘高い声は部屋中どころか、宿中に響き渡った。

「うつっ…」

翔子の声に反応したのか、シャルナの右手が動いた。

「起きてえ！起きてよう…」

「…落ち着いて下さい。簡単には死なないと言いましたよ。」

シャルナはゆっくり起き上がりながら言った。

「よ、良かったあ…。本当に死んじゃったのかと思ったもん。」

翔子の目には安心したのか、涙がたまっていた。

「その場にいなさいと言ったはずですよ！」

シャルナは立ち上がり、きつく言った。

「だって、相手は武器があっただよ！助かるわけないじゃん！」

翔子は涙は収まったが、シャルナにきつく注意されてあまり良い気にはならず、反発してしまった。

翔子は家でも親や兄弟にいつも反発していた。
自分の意見が通らないのが気に入らないのだ。

「大抵の方なら翔子さんの立場になれば、同じように思うと思いますし、出会ったばかりの私を信じるのも無理があるでしょう。ですが、今は私を信じて下さい。この世界のこともしくはお話しなくてはならないようですね」

シャルナは今度はきつくは言わなかったが、翔子の目をしっかり

見て言った。

翔子はシャルナの目が苦手だ。

心を見透かされ、逆らうことのできない漆黒の瞳。

シャルナに嘘やごまかしは通用しないだろうということは翔子にもわかっていた。

「ごめんなさい…」

翔子は低く小さな声で言った。

「無事なのがなによりです」

シャルナは笑顔で言っ、翔子の手を握った。

その手は暖かく、とても温もりのある手だった。

「シャルナさんの手あったかい。なんだか安心するよ」

翔子は服の袖で涙を拭き、笑顔になった。

「笑っていたほうが素敵ですよ」

シャルナの顔は昨夜からは想像もつかない程、とても優しくなった。

「えっ…」

翔子の顔はほんのりと紅くなった。

翔子はとても厳しく育てられた為、こんなに暖かい気持ちになったことはあまりなかった。

なので、いきなり手を握られて恥ずかしい気持ちもあったが、本当はとても嬉しかった。

だが、翔子はこれからどうなっていくのか不安だった。
なにせ、地球に帰る方法はあるのだろうか。

宿の中を見る限りでは、コンピュータ技術は地球の方が明らかに進んでいることが予想される。

部屋にはテレビもエアコンも冷蔵庫もなく、ランプが電気の変わりになっていた。

窓の外も辺り一面は木ばかりで、遠くに高原らしきものが見えるだけで、街らしいものは見えない。

翔子はこの世界に来るすぐ前に何をしていたのか思いだそうとしたが、思い出せなかった。

それが思い出せれば、帰る手掛りが見付かるかもしれないと思った。

だが、その時の記憶がどうしても思い出す事ができない。

思いだそうとすると、酷く頭痛がし、翔子は頭を押さえて屈み込んだ。

「どうされましたか？」

シャルナは少し屈んで、心配そうに声をかけた。

「思いだそうとすると頭が痛むの。どうやってここに来たのかって」

「……」

シャルナは何も言わなかった。

「もしかして、もう帰れないの？」

何も言わないシャルナに、翔子は不安になる。

「ここに来た方法があるのなら、帰る方法もあるはずです。その為にはどうやってここに来たのかわからなくてはなりません」

本当は戻れる確信はないだろうとシャルナは思っていた。

何かひっかかっている事があった。

それが何なのかはわからないが、シャルナがこう思う時は必ず何かが起こる。

翔子も怖い思いをして、警戒しないはずはないが、シャルナは翔子が思っているよりもっと大変な事が起こりそうな予感がした。

シャルナは今までもたくさんの危険に遭遇したが、知らない世界から女の子がやってきて、魔族に狙われている。

こんなことは前代未聞だった。

何かが起こらないはずがないのだ。

「シャルナさんこそ、どうかした？」

翔子もすぐには帰れないだろうとわかっていた。

そして、これからたくさんの危険が待ち受けているような気がしてならなかった。

きっと翔子もシャルナと同じような気持ちなのだろう。

ここは違う世界なのだから、尚更だ。

「この世界の事、詳しく教えて」

翔子は膝を抱えて立ち上がって言った。

「そうですね。翔子さんは知る必要がございます」

シャルナも立ち上がり、ドアノブに手を懸けた。

「まずは朝食にしましょう」

シャルナはそう言って部屋を出た。

翔子はお腹ペコペコだった。

そろそろ腹の虫も限界だ。

この世界にやって来てから、何も食べていない。

シャルナは調理場を探しに一階へ降りていった。

昨夜のダーカスの呪文はやはり本物だった。階段にいた男も、女将さんの遺体も、血の後さえも何も無かったようになくなっていた。

「この先また襲われることがあったら……」

次にまた襲われたら、シャルナは殺され、翔子は捕えられてしま
うだろう。

だが、翔子がどうしてこの世界にやってきたのか、地球とはどんな世界なのか、シャルナにはわからない。

もっとも前者は翔子自信もわからないのだが。

今、シャルナにわかっていることは一つだけ。

よきせぬことに巻き込まれてしまったということだけだ。

細身の青年も銃の腕前はなかなかだったが、あのダーカスという男はとても膨大な魔力を秘めている。とても立ち打ちできそうにない。

だが、ここまで関わってしまった以上、シャルナも逃げるわけにはいかない。

助けた人を易々と見捨てることはできない……

一階のカウンターの横の扉を開くと、木箱に入ったたくさんの野菜や果物、棚には調味料や水、チーズやヨーグルトなどの加工食品が壁際にずらりと並んでいる。

シャルナは棚から牛乳瓶程の大きさの瓶と、丸くて手のひら程の大きさのパンを取って、足速く部屋に戻った。

「あ、おかえりなさい」

シャルナが部屋に戻ると、翔子はダーカスの竜巻で倒れた机と椅子を戻し、机をピカピカに拭いていた。

「綺麗じゃないとご飯おいしくないもんね。何か見付かった？」

「ええ。パンと牛乳ではいかがでしょう？ところで頭痛はもう良いのですか？」

シャルナは机の上にパンと牛乳瓶を置いた。

「パンと牛乳？十分十分。頭ももう大丈夫！それより、めっちゃ静かだけど、ここって誰もいないの？外はさつき人がいたよ」

「今からお話し致します。食事しながらで結構です」

シャルナは椅子に腰かけた。

竜巻の影響で左前脚がわずかに曲がっている。

シャルナが真剣な口調だったので、翔子も何も言わず椅子に腰かけた。

「質問は後で伺うので、今は私の話を聞いて下さい」

翔子がこくりとうなずき椅子に腰かけたと共にシャルナが話し始めた。

「まず……この世界は今から約五億年前、四人の神によって造られたのです。そして今私達がいる人間の国、神にもっとも近い場所に存在するという神の国、極力な魔力を持った一族が集まる魔の国の三国からなっています。神の国には神に最も近いとされる神族が暮らし、魔の国には魔族と呼ばれる魔術に優れた一族が暮らしています。ここまでは、お分かりいただけましたか？」

「うん、大体は……」

翔子にとっては本か映画を見ているかの様な話だった。

「そして今、魔の国は人間の国を支配して国をもっと発展させようと戦争をしています」

「じゃあ、昨日の夜は魔族が攻めて来たってこと？」

「そう……なのですが、一人は森で翔子さんを撃った方だと思われます。もう一人は魔族の方でしたが、とてつもない魔力を持っていたので大変危険です」

シャルナの口調があまりに真剣で威圧感があつたため、翔子は少し引き気味だ。

「二人だけだったの？」

戦争なのに何故攻めるのがたつた二人なのかということに、翔子は疑問を持った。

戦争を知らない翔子でも、そのくらいはわかる。

この世界では大勢では攻めないのだろうか？

「二人は翔子さんを探していました。おそらく翔子さんがこの世界に来たのとの関係があるのでしょうか」

シャルナはまた翔子の頭が痛まないか心配しながら言った。

翔子はまさかとは思ってはいたが、それが本当かもしれないと思うと、体の震えが止まらない。

一体自分はどうして狙われているのだろうか。

少なくとも、翔子にとってはよくないことだろう。

いきなり知らない世界にやってきて、危ない人達に狙われたら、普通の人ならどうしていいかわからない恐怖にかられてしまうだろう。

翔子もそんな気持ちだった。

だが、シャルナはどうするのだろうか。

大抵の人なら、厄介なことに関わってしまったことを後悔し、都合のよい言い訳を作って逃げるのだろうと翔子は思った。

シャルナの表情から、相手は相当ヤバイ人だ。
殺されるかもしれない。

誰だってこんな事に関わりたくないに決まっている。

翔子はまた頭痛にみまわれた。

シャルナは夜だって命を顧ず、翔子を助けてくれた。

だが、その時はまだ相手の恐ろしさを知らなかっただけで、今は知っている。

シャルナもきつと自分を助けてくれないのだと翔子は思った。

だけど、そうなってしまったらどうすればいいのだろう。

きつと相手に捕えられ、恐ろしい目にあうのだろう。

そう考えるだけで、頭痛はどんどん増してくる。

「翔子さんと出会ったのも、何かの縁だと思うのです」

シャルナは翔子の両手を自分の両手で優しく覆って握った。

「ここまで知ってしまったては、もう引き返す訳にはいきません。帰る方法を探さなくてはいいけません」

シャルナが翔子の手をぎゅっと少し強く握ると、シャルナの手から黄色い光が放たれ、その光は翔子の全身を包んで、風に吹かれていくように消えていった。

「今の黄色い光が魔族の攻撃をはね返してくれます。ただ受けた威力や回数が多くなるにつれ、効き目は薄くなるので気ををつけて下さい。」

シャルナはどこから見ても人間だ。
何故こんな力があるのだろうか。

「前にお話ししたように、私は魔法使いのようなものだと思っていただければいいですよ」

翔子は目を真ん丸くした。

前は薬で言葉が通じるようになったのだが、今回は手から光が溢れ出て来たのだ。

やはりこれは夢なのだろうか。

「この世界の人はみんな魔法できるの？」

翔子は特別な人でなければ使えないだろうと思っていた。

「個人差はありますが、鍛えればできますよ。人間にはある程度限界がありますが、素質があれば、なかなかのものですよ」

「じゃあ、あたしもできる？」

翔子はせめて夢ならば、使ってみたいと思った。

「ショーコさんは異世界の方なので、わかりません。それに取得するには何年も修行を積まなくてはなりません」

残念だ。

それじゃあ夢から覚めるまでに覚えられない。
わけもわからない世界にきて、狙われるだけの夢なんてたくさんだ。

「シャルナさんも修行した？」

あれだけ使いこなせていれば、かなりの修行を積んでいるはずだろう。

「ええ。私は剣術が専門でしたが」

シャルナは茶色い布でぐるぐる巻きにされている二本の剣のうちの一本を翔子に見せた。

もう一本はそれより太く、長さもあった。

「本物？」

翔子は本物の剣を見るのは初めてだった。
刀だって本物は見たことがない。

シャルナは布を取ると、銀色に光る剣が現れた。

シャルナは右手でゆっくりと剣を抜いた。

剣はスーッと刃の音を立てて、ピカピカに光る刃を見せた。
指でなぞっただけでも切れそうな程、切れ味は良さそうだ。
こんなものをシャルナはいつも扱っているのだろうか。

「す、すごい…」

翔子は思わず息を飲んだ。

「旅に危険はつきものですからね」

シャルナは当たり前のようにそう言って、ゆっくりと剣を納めた。

剣はまたスーッと静かに刃の音を立てた。

「では、そろそろ出発致しましょうか」

シャルナはリュックを背負い、そこに剣を差し込んだ。

テーブルにはパンが少し残っており、翔子はもったいなく思っ
て部屋で見つけた布袋にパンの余りを突っ込んで、勉強用具は一切な
く、化粧品と雑誌とお菓子でぎゅんぎゅん詰め
の鞆に押し込んだ。
おそらくパンの形は変形しただろう。

パンパンの鞆のチャックを閉めるのに苦労しながら、二人は部屋
を出た。

二人以外は誰もいないため、古めかしい床のきしむ音が響いた。

宿の出入り口の扉をシャルナが開くと、スッと朝日が差し込み、
薄暗いロビーを明るく照らした。

二人は外に出た。

部屋の窓から見たときに森の木だと思っていた木は、栽培されて
いるようだった。

同じ木が何本も連なり、土は綺麗に整備されていた。

周りの家も木だったり、花だったり植物は違うが同じようで、家
も映画や本に出てくるよう

な、かわいらしい家ばかりだった。

おまけにどれも見たこともない植物ばかりだ。

昨夜シャルナが言った通り、ここは農業が盛んな村だけに、早朝
からたくさんの人が植物を耕したり水をまいたりしている。

見慣れない光景に翔子は呆然と立ちすくみ、周りをキョロキョロ

見渡していた。

車や自転車ではなく馬車が走り、建物は全て木製で道さえも作られていない。

科学や機械とは程遠い世界だ。

「シヨークさんの住んでいらっしゃる所はどのような感じなのでしょう？」

翔子が見慣れない光景にあまりに挙動不振なため、シャルナは興味深々だ。

翔子は東京育ちの、幼稚園からエスカレーター式のお嬢様学校に通っていたため、田舎に行ったこともないのだ。

日本の田舎にも車や電車は走っているが、ここは馬車だけらしい。翔子はシャルナは車や電車を知らないだろうと思い、答えに悩んだ。

「ここには車や電車はあるの？」

まずないだろうと思ったが他に答えが思い付かなかった。

「それは…どんなものですか？」

シャルナは聞いたことのない単語に困っていた。

シャルナの困っている顔を初めて見て翔子はぷぷつと吹き出した。

「何がそんなにおかしいのです？！」

シャルナは語尾を強めに、少し怒ったようだった。

「あはは、ごめんごめん。魔法使いでも困ることってあるんだな！
って思ってた！」

翔子は笑い混じりに言った。

謝っても明らかに反省しているようには聞こえない。

シャルナの意外な反応に、翔子はツボにはまってしまったようだ。
シャルナは何も言わず少しムツとした顔をしていた。

「馬車みたいに車輪が付いててね、機械で動くんだよ」

シャルナのムツとした顔を見て、翔子は笑いを必死にこらえて言った。

「キカイ…ですか？」

「うん、知ってる？」

シャルナの反応が変わった。

機械はこの世界にもあるのだろうか。

あったとしても、あまり発展していなさそうだが。

「確か、ハリー・クリアスの研究資料という本に出てきましたよ。
シヨーコさんが診ていただくはずだった名医が著者した本です」

研究ということはやはり発展していないらしい。

「医者なあげく機械も研究してるなんて、すごいね」

「本職は医者らしいのですが、学者としてもいろいろと研究されているようなのです。もしかしたらシヨーコさん、チキューに帰ることができるかもしれません。百パーセント確信はありませんが」

シャルナは思い付いたように言った。

確信はなくても、なにもしなければ始まらない。

「機械でどーやって地球に帰るの？」

場所を移動できる機械は地球にはない。

ましてや発展していない星で、そんなことが可能なのだろうか。ドラ。もんの道具じゃあるまいし。

シャルナは、翔子がテストで問題がわからず、悩んでいるのと同じ様な顔をして、本の内容を必死で思い出していた。
機械の名前しか知らないシャルナにとっては、理解しづらいことなのだろう。

「えーっと、確か、“タイラシン”という時空を移動できるキカイなのです。こととチキューでは、時空のずれがあるので、移動できると思っています」

シャルナは片言で必死に話した。

「説明にいたらない点が多々ございまして申し訳ございません。なにせ二・三年程前に読んだ本ですので、あまり深く覚えていないのです。それでも少しでも理解していただけたら良いのですが」

「今ので十分だよ。てか、タイムマシンじゃない？」

「あつ、そうです！そうです！」

全く無知のことをここまで説明できるのに翔子は驚いた。
シャルナは翔子の訂正に納得し、ちゃんと思いついたので嬉しうだ。

ただ、シャルナの言ったことが理解はできたのだが、翔子は一つだけ疑問に思うことがあった。

「移動できる魔法はないの？」

この世界には魔法がある。

タイムマシンがなくても魔法で簡単に戻ってしまうのではないか
と思った。

「転移魔法があります。ですが、地球の場所を私達は知りませんし、
かなり膨大な時空を越えることになるのでそれなりの魔力がなくて
は危険なのです。おそらく“タイラシン”に大量を魔力を注ぎ込む
のだと思います」

魔法の話になり、シャルナはさっきよりもスラスラと話した。

「タイムマシンね」

「ああ、また間違えてしまいました。ごめんなさい」

翔子はシャルナのミスにバシッと突っ込み、シャルナは慌てて訂
正した。

「じゃあ、そのお医者さんのところに行くんだね」

「はい、サンクルナまで距離があるので、馬車を借りましょう」

二人は村の人々が畑を耕したり、水や肥料を蒔いているところを見ながら歩き出した。

昨夜の宿での出来事はどうやら知らないらしい。

それどころが、翔子達に挨拶し、どこから来たのかと訪ねる村人もいた。

さすがに翔子のことを話すわけにはいけないので、シャルナは自分の故郷であるウエリントンと答えていた。

すると村人はウエリントンのことを目を輝かせて質問してくる。

ここカスター村からウエリントンまでは長い道のりであり、国一番の大都市に関わらず行ったことのない人々はたくさんいるのだ。

シャルナは長くならない程度に、にぎやかな街の様子や市場の話などをした。

初めは数人に話していたのだが、話しが終わる頃には周りで農作業をしていた人々の集団ができてきた。

話しているのはシャルナだが、翔子は真っ直ぐに注がれているたくさんの視線に緊張し、シャルナの後ろに身を隠した。

シャルナも緊張していたのか、村人から盛大な拍手が贈られると顔がほのかに赤く染まった。

「いやいや、めったに聞くことのできない貴重なお話でしたよ。やはり都会は素晴らしい！」

村人を代表し、宿の目の前の家で気に肥料をまいていた小柄な男

が絶賛した。

「ところで、何故このような田舎に？」

「サンクルナに向かう途中です」

「それならこの宿を西にしばらく歩けば馬車庫がありますよ。」

小柄な男性は馬車庫の方角に指を指した。

「それと、少しですがこれを」

小柄な男性はみかんのようなものがたくさん入った布袋を差し出した。

翔子は中を覗き込み、まじまじと見つめた。

こういう時はとりあえず断るのが礼儀なのだろうが、甘い香りがブンブンと漂い、とても美味しそうだ。

食べたい…

「ありがとうございます。お昼にでも頂きますね」

断ると思っていたのだが、シャルナは笑顔でそれを受け取り、深く頭を下げたので、翔子も慌てて頭を下げ、馬車庫に向かった。

「食べたかったのでしょうか？」

シャルナは翔子に微笑んだ。

「新たな出会い」

歩いて五分もたたないうちに、メルヘンチックな家々に囲まれた中に、古めかしい長家が見えた。

外にわらが山積みになれ、壁や屋根が所々はがれている程ボロボロで、家というより小屋に近い雰囲気を漂わせている。

ここが馬車庫だろう。

壁づたいに歩いていくと、入り口の柵がはずされていた。

中はとても広々していて、馬がいるはずの檻は馬糞が積まれている、古いわらがかすかに残っているものばかりで馬が見当たらない。

唯一、一番奥の檻が一番さびており、今にも外れそうな程の檻の中で、二匹の茶色い馬が二人をじっと見つめているだけだ。

「人がいませんね」

殺風景な小屋を見渡しながら、シャルナが言った。

「そんなことよりさ、この臭いなんとかならない？何この臭さは？！」

馬糞の臭いが小屋中に充満しており、翔子は鼻をふさいで大きな声でわめいている。

そんな翔子とは対照的に、シャルナは平気そうだ。

「いらつしゃい」

翔子が馬糞の悪臭にもがいている中、奥のドアから小太りの老人

が現れた。

「馬車に乗りたいのかね？」

「はい」

シャルナはまず悪人ではないだろう馬車小屋の老人にまで、警戒の眼差しを向けている。

どんな相手にも隙を見せようとはしないのだろう。

だが、この老人は昨夜のダークスとは違い、そのように見られていることに気がついていないようで、とても申し訳なさそうに、ゆっくりと話していた。

「あいにく見てのとうり、馬が皆出払ってしまっているのう」

「あの馬は？」

シャルナは一番奥の古ぶた檻の中にいる二匹の馬を指さした。

「昨夜ここで寝かせてくれと言ってきた旅人の馬じゃよ。うちで泊めても良いと言ったんじゃが、ここで良いと言い張ったんで……」

シャルナがその檻の中を覗き込むと、馬車の運転席で一人の男がカウボーイのような帽子を顔に寄せ、仰向けに眠っていた。

「こ、こんな臭いでよく寝られるなあ」

翔子は寝ている旅人も老人もシャルナも、嗅覚に異常があるのではないかと思った。

この世界の人々は、地球人より嗅覚が発達していないのだろうか。

「お嬢ちゃんは魔族なのかい？」

老人は少し声を忍ばせた。

シャルナも魔族の話をしたときとても真剣だったため、魔族はとても危険だということがわかった。

大抵の物語で魔族が悪役になっているのは、間違っていないようだ。

「あたしは人間だよ。何を根拠に魔族になるわけ？」

「魔族は臭いに敏感なのです。人間は臭いは魔族と同じように感じますが、このくらいなら何とも思わないのですよ。シヨークさんは人間ですが、臭いは敏感で……」

シャルナは翔子に説明したあと、老人に翔子は人間だと話すと老人は納得した。

「疑って悪かったのう」

老人は翔子の前に膝をついて頭を地面に付けた。

「そ、そんなに謝らなくて良いって」

翔子は引いた。

シャルナも助けてもらった日に、翔子に膝を付いて謝ったことがあった。

外見は似ていても、生活や文化にはやはり大きな違いがあるようだ。

「つたく、うつせえなあ」

翔子の声は小屋中に響いていたため、馬車で寝ていた男は目を覚ましてしまったようだ。

「もう十分寝たと思うんじゃないの」

「寝る子は育つつつうだろ。まだ寝たりねえよ。ところでその姉ちゃん達誰だ？」

筋肉質ながつしりした体型で、短い金髪に蒼い目、短いあご髭を生やした白人のような男はあくびを連発し、不良のような話し方だ。第一印象は最悪である。

シャルナは警戒するまでもないのか、平然と金髪の男に話した。

「あなたと同じ旅人です。ここには馬車を借りに来ただけですよ。起こしてしまい申し訳ありません」

「ご丁寧にも。姉ちゃん達かわいいから、なんなら俺様が無償で乗せてやってもいいぜ？」

ルックスは悪くはないが性格に問題ありといったところか、下心丸見えだった。

「どうします？」

シャルナは金髪の男の下心に気が付いているのか、いやシャルナなら気が付いているはずだが、翔子がうんと言ったら男の馬車に乗るのだろうか。

「この方、悪い人ではないと思いますよ。ただ調子がよくて口が悪
いだけです」

さすがシャルナだ。

人格を見抜くのはお手の物だ。

「初対面の奴によく言っぜ」

あまり良いことを言われたわけではないのに男は少し嬉しそうだ。

「どこへ行きたいんだ？」

男は帽子をかぶり、檻のドアを開けてシャルナの前にやってきた。
帽子はなかなか似合っている。

「サンクルナへ」

「これまた遠いな。最近はぶっそうだから女二人じゃ危険だな。よ
うし、決まりだ！」

男は二人の意見も聞かずに乗せる気満々のようだ。

「この人が危ないんじゃない」

翔子は小声でシャルナの耳元で囁いた。

「大丈夫ですよ。ちゃんと辿りつけるかは心配ですが…」

「俺はこれで稼いでるんだぜ。心配すんなって」

男は自信満々に言うと、二匹の馬を馬車に繋いだ。

「クリスティーヌ、ローランド、仕事だぞ」

右がクリスティーヌで左がローランドのようだ。

どちらも茶色い普通の馬だが、よくみるとクリスティーヌのほうが微妙に茶が薄く、ピンクのリボンを耳につけている。

ローランドはチョコレートの様なこげ茶色で黄色いリボンをつけていた。

クリスティーヌよりも体格ががっしりしていて、背も少し高い。

「狭いし汚ねえけど、乗ってくれ」

金髪の男はつぎはぎだらけの古びた馬車のドアを開けた。

ギーっと今にも外れそうな音がした。

窓のガラスまでかけている。

「大丈夫かなあ……」

おんぼろ馬車を見て、翔子は走っているうちに崩れるのではないかと心配になった。

「見た目は悪いけど、何度も危険を乗り越えてきた、俺様自慢の馬車だぜ」

金髪の男の瞳はは自信に満ち溢れている。

シャルナも不安なのだろうか、深い溜め息をついた。

「サンクルナまで二週間はかかると思っぜ。それまでよろしくな」

翔子とシャルナの気持ちを何もさっせず、金髪の男はあいさつをした。

「俺はジェーン・マクレラン。二週間は一緒にいるわけだから、名前くらい教えてくれよな」

「シャルナ・カーレラです。こちらはショーク・カトーです」

シャルナは深く頭を下げたので、翔子は軽く頭を下げた。

軽く下げたのは、金髪の男の態度がよくないので、あまり丁寧に挨拶する必要がないと思ったのと自分の名前は这个世界では変わった名前だろうと思ったので、少し恥ずかしかったからだった。

「ショーク？変わった名前だな。格好も変わってるし、どっかの民族か？」

ジェーンは翔子をマジマジ見つめた。

翔子はそつと後ずさりし、シャルナの後ろに隠れた。

翔子は高校の制服のブラウスとスカートを着ているが、この世界の人々は中世の映画に出てくるような格好だ。

翔子のような格好はかなり目立つ。

「やはり魔族かな？」

老人はまだ翔子が人間はないという疑問を捨てきれないようだ。

「劇団のものなのです。」

翔子の様子を伺いながら、シャルナが言った。

「へえ、それは衣装なんだな。名前は変わった奴なんて結構いるかな」

「ほほう」

ジェーンも老人も納得したようだ。

翔子は少し安心して軽く溜め息をついた。

そして

「ありがとう」

とシャルナの耳元で囁いた。

翔子、シャルナ、ジェーンの三人はおんぼろ馬車に乗り込むと老人と村人に手を振り、カスターを後にした。

目指すは東のサンクルナ。

だが、サンクルナまでは、西のウエズ地方で最も広いとされる、ラーズ平原を越えなくてはならない。

翔子はこれからしばらくは劇団員を演じなくてはならないので不安だった。

もちろん下手な芝居をすればバレてしまうだろう。

ジェーンが鈍そうなことが唯一の救いだ。

そして何より心配なのが、この馬車。馬は元気で体格も良いし、ジェーンの腕もまあまあだったのだが、馬車があまりにおんぼろ過ぎることだ。

二人が座っただけで、椅子はギギッと崩れそうな音をたて、窓はずっとガタガタ揺れていた。

おまけにクモのような姿をした、パイという虫の巣ができており、

馬車に乗る前、虫が大嫌いな翔子は大騒ぎし、ジェーンはパイと格闘したため、客席と運転席の間の壁が壊れ筒抜けになった。パイはとても敏速な虫なのだ。

ジェーンはなんてこったと叫び、虫くらい我慢しろと翔子を責めたが、翔子はジェーンのやり方が悪いと言い返したので口論になり、シャルナと老人では手におえず、出発は昼過ぎになってしまった。

そして今、翔子とジェーンの間にあまぬ臭い空気が流れている。

「まったく、虫嫌いな奴なんて貴族くらいしかいねえぞ。劇団員のくせになんつー生活してんだ？」

壁が筒抜けのため、ジェーンの陰口は全て翔子に聞こえている。翔子は客席の隅でうずくまっている。

「壁なら私が直します。シヨコさんも悪気があったわけではありませんし」

シャルナはこのどんよりした空気を少しでも明るくしようと、出発してからグチを続けるジェーンに話しかけた。

「姉さんは何も悪くねえ。そこのガキだよ、ガキ！」

ジェーンは横目で翔子を睨んだ。

自分のプライドが傷付くのが相当気にくわないようだ。

「いくら二週間だといっても、このままではいけませんよ、二人とも」

シャルナは二人の間を少しでも明るくしようと努めた。
二週間もこの調子ではたまらない。

「あ、カスターの方から頂いた果実があるんですが、頂きませんか？ ショーコさん、食べたいとおっしゃってたじゃないですか」

シャルナは貰った果実を翔子に差し出したが、翔子は顔を上げようとしない。

シャルナは果実を布にくるんで、翔子の足元に置いた。

「ジェーンさんはいかがですか？」

シャルナはジェーンの後ろからそつと果実を差し出した。

「姉さん… 剣士か？」

ジェーンは振り向かず、落ち着いた口調でシャルナに問いかけた。
シャルナは果実を袋にしまい、黙ったままジェーンの背中を見つめた。

「剣を布にまでくるんで隠したいみてえだが、手を見りゃわかるぜ。
鞘から抜いた傷だらけだ。それも人並み以上にな」

ジェーンはさっきまでの陰口とは全く違った、冷静な口調になった。

ふうつとシャルナは深く息を吸い込んだ。

ジェーンは単純だが、剣士としてはなかなかのようだ。

それなりに鍛え挙げられた剣士でなければ、鞘の傷はわからない。

「隠しているつもりはありません。ショーコさんには剣を見せまし

た。ただ、あまり人を斬りたくないのです」

シャルナはジェーンの背中を真っ直ぐに見つめて言った。

「姉さんみてえな美人は人を斬るなんて似合わねえよ」

ジェーンはシャルナに話すのではなく何かを思い出しているかのように話している。

「姉さんは何で剣士になったんだ？姉さん美人だから他にも仕事はあるだろ？」

ジェーンは何かを隠すようにはまきを吸い始めた。こんなことでシャルナをごまかせるはずなどない。

「わ、私は…」

シャルナはうつ向き、言葉が小さくなる。

そしてふうっと大きく深呼吸し、また真っ直ぐにジェーンを見つめた。

ジェーンははまきを吸ったまま背を向けていたが、シャルナの視線は痛いほど伝わって来る。

「私は、自分の愛する人達を守りたい。それだけです。」

シャルナはジェーンを真っ直ぐに見つめたまま、はっきりと言った。

ジェーンはぷつと吹き出し、はまきの煙が喉に詰まり、コホコホ咳き込んだ。

「女は守られるもんだろ？」

「男女差別！初対面なのにそんな質問失礼だよ！」

笑いに耐えながら話していたジェーンに、さっきまで隅で怒ってすねていた翔子がますます怒って言った。

「うるせえ！女を守ってどこが悪いんだよ！」

ジェーンは咳き込みながら、たずなをきつく握りしめた。

翔子とジェーンの間ますます重たい空気が流れ、もうシャルナは何を言えばいいのかわからなくなってしまった。

「トラブルメイカー」

周りの景色はだんだん殺風景になってきた。

家はもうほとんどなく、所々に木や草花が生えているだけだ。

もう村を出て、ラーヌ高原に入るのだろう。

平原で何か思いついたように、シャルナは出来るだけ笑顔を作り、楽しそうに話をした。

「そ、そういえば、ラーヌ平原には羽根がとても美しい鳥がいるんですよね。その美しさゆえに密猟者に狙われ、今では絶滅の危機だとか。探してみましようよ！」

「はっ、んなもん素人の俺らに見つけられるはずねーだろ。」

ジェーンはイライラした様子で加えていたはまきの先を噛んで、口でぶつと捨てた。

はまきは少し転がって、草と土の色に紛れて見えなくなかったが、辛うじて細い煙があがっていた。

それを見たシャルナが窓の割れ目から後ろを見たとき、もう細い煙ではなく、真っ赤な火の手がもくもくと煙を上げていた。

「火事です！」

シャルナは大声で言ったが、相変わらず冷静だった。

ジェーンは後ろを振り向くと真っ赤な火の手が上がっているのが見えた。

「ちっ、俺のせいだよ。」

ジェーンはたずなを持ち直し、馬をバシバシ叩き始めた。

馬車は速度を上げ、殺風景な平原を駆け抜けた。

一体どこにこんなに動物がいたのかという程、石の間や所々に開いた小さな穴からリスのような動物がたくさん現れ、煙とは逆方向に逃げて行った。

翔子はそつと窓からその様子を見ていた。

この世界に迷い込んでから三日経つが、毎日が波乱万丈だ。

森に迷って、危なさそうな人達に襲われ、馬車の運転手のせいで火事になったり…。

これからもこんな事が続いたら、無事に地球に戻るのだろうか。それはきつと、もつと危険なことに違いないだろう。

シャルナに出会った事が唯一の救いだろう。

不安でいっぱいだが、今は今できることをやるしかなさそうだ。

馬車は速度をどんどんあげて、タイヤやドアは今にも外れそうな音をたてていた。

「火事、ほつといていいの？」

翔子はジェーンに聞こえないよう、小声でシャルナに訪ねた。

本当は馬車が壊れないか心配だったが、それはシャルナも同じだろう。

シャルナは黙って立ち上がり、後部の窓を開けた。

だいぶ離れているはずだが、炎は威力を増し、さつきよりも大きく見えた。

シャルナはリュックの中から、また小さな瓶を取り出した。今度は水色の透明な粒のようなものが入っている。

「それで火が消せるの？」

また魔法だろうと思い、翔子は少しドキドキした。

「まあ、見ていて下さい。」

シャルナは瓶から水色の粒をてのひらに三粒取り出し、それを火の手に向かって息を吹きかけようとした。

その時だった…

「キシヤー！！」

耳が痛くなる程の鳴き声のような、超音波ともいえるような声が高原中に響き渡った。

「な、なんなのー！？」

翔子は耳をふさいでその場にうずくまった。

馬達は暴れだし、ジェーンは必死にたずなを引いている。

動物達の動きは一瞬止まると、一斉に上空を見上げた。

そして一匹がキツキツと鳴くと、一斉に猛スピードで高原を駆け抜けていった。

ジェーンは暴れる馬達を落ち着けようと、たずなを引きながら上空を見上げた。

たずなはちぎれそうなくらい張っている。

「おおお、おいっ！あ、あれ見ろよ！」

ジェーンは上空を指差しながら、とても驚いた様子だ。
翔子とシャルナも運転席にやって来て上空を見上げた。
翔子はまた何か危険な目に合うのだろつかと不安だった。
その予感的中しそうだ。

上空にはオレンジ色の、鷹の二倍はありそうな巨大な鳥が飛んでいた。

首やくちばしは白鳥のように長く、爪は大きく鋭くがついている。

「もしかして、ヤバイ？」

だんだん大きくなっていく鳥の影を見ながら当たり前のように翔子は言った。

「ああ、降り落とされるなよ。」

ジェーンがたずなを緩めると、馬達は猛スピードで走り出した。
馬車は激しく揺れ、今までも外れそうなのは何度もあったが、
今まで以上にタイヤは傾き、ドアはバタバタ音をたてている。

翔子は後ろに席に背中をうちつけられ、席の両端にある、小さな
手すりにしがみついた。

シャルナは運転席に転がり込み、ジェーンに後ろから抱きつくようにしがみついていた。

「なっ！？ なんな……」

ジェーンは顔が真っ赤になっている。

突然の出来事に驚いたのか、ジェーンは思わずたずなを手から放してしまった。

たずなはローランドの後ろ脚に引っ掛かり、もう取れない。

ローランドとクリスティーヌは危機的状况に気が付いているらしく、ジェーンがたずなを握っていたときより何倍であるうというスピードで走り出した。

ローランドは脚にたずなが引っ掛かっていることなどおかまいなしのようだ。

シャルナとジェーンは翔子のいる後部座席へ、抱きついた体勢のまま転がり込んだ。

シャルナの胸がジェーンの背中で潰され、ジェーンは何が何だかわからないまま、放心状態だ。

「ジェーンさん、く、苦しいです……」

ジェーンはもろに後の席にぶつかったので、シャルナは胸だけでなく、完全にジェーンに潰されていたのだ。

「エロいこと考えてないで、早くつかまりなよ！」

ジェーンの真っ赤な顔を見た翔子は、手すりに必死につかまりながら怒鳴りつけるように叫んだ。

だが、馬車は激しく揺れているため起き上がるだけでも人苦労しそうだ。

ジェーンは床に両手をつくつと、一気に体を起こし、翔子とは反対側の手すりにつかまった。

シャルナは後の席にもたれかかる。

「キシヤー！」

巨大な鳥の鳴き声がさっきよりも大きく聞こえてくる。

「あんな奴がいるなんて聞いてねえ」

「あんたがここまで非常識だともきいてないよ。火事起こすなんてさ」

翔子はつつ向き、必死にしがみついたままジェーンに怒鳴りつけた。

「はあ？ アイツが現れたのが俺のせいだっていうのか？」

「そーよ！」

こんな非常事態にも関わらず、翔子とジェーンは言い争っている。

「そんなことより、今は逃げることを考えるべきではないんですか？」

逃げることは考えているのかという程、ピリピリした空気を流している翔子とジェーンの間、シャルナは割り込んだ。

「ショーコさん、原因はジェーンさんのはまきで起きた火事だということも考えられなくはありませんが、今は言い争っている場合ではありません。ジェーンさんにも言えることですが、私達は知り合ったばかりなので、衝突することもあるでしょう。ですが今、争っていたら、あの鳥にやられてしまいますよ！あの鳥からは、魔力を感じるのです」

「魔力だつて？」

シャルナのお説教で歪んでいたジェーンの顔が更に歪んだ。

「この野郎！魔族なら俺が叩きのめしてやる！」

ジェーンはそう言って床をはいずって入り口の扉の前まで来ると、手を伸ばしてドアノブに手を掛けた。

ガシャン！

「っ……！」

シャルナが言葉を発するより早くドアは開き、ジェーンは巨大な鳥が飛び交う平原の大地へと転がり落ちた。

「お……落ちた」

翔子は手すりにしがみつきながらも、目を見開いて開いたドアを見ていた。

「あ、危ないっ！」

翔子の視界にシャルナが入る。

シャルナはドアから外を見ている。

……ジェーンの姿はない。

巨大な鳥は馬車とは逆方向に飛び始め、その姿はだんだん小さくなっていく……

馬はもう安全だと気付いたのか、馬車は止まった。
クリスティヌとローランドは、だんだん小さくなっていく巨大な鳥の姿を見つめている。おそらくジェーンのことが気になっているのだろう。

「シヨークさん、こちらへ」

翔子はシャルナに呼ばれ、おそろおそろ立ち上がった。

「この馬達はとても賢いです。たずなをしっかり握っていればサンクルナへ連れて行ってくれるはずです」

シャルナはローランドの脚にひっかかっていたたずなを拾った。

「シャルナさんはどうするの？」

翔子はまた宿の時のように、シャルナは自分を置いて行くのだとわかっていた。

「あれを見てください」

シャルナが指さした先を見上げると、巨大な鳥が、こちらに向かって飛んで来ている。

その脚には、さっきは尾羽根で見えなかったが、何か掴んでいるようだ。

「……あ、おっさん！」

翔子が叫んだその先には、鳥の脚に掴まれたジェーンがいた。

シャルナはそつと馬車を降り、たずなを翔子に渡した。

「少しでもここから離れて下さい」

翔子は、すぐには返事ができなかった。

確かに怖い。

あんなに大きな鳥は見たことがないし、この世界では死にそんな目にばかり合う。

逃げたいのはあたり前だ。

だが、自分だけ逃げていいのだろうか。

二人がもし戻って来なかったら、自分はどうしたらいいのかわからない。

「行かないで……」

翔子はこの状況では言うてはいけないことだとわかっている。

だが、もう他人のことなど考えている余裕など翔子にはなかった。人生に一度もないようなデンジャラスな経験をして、他人のことを考えている人のほうが、ほんの少数だろう。

18歳の少女にこんなことができるわけがないのだ。

「シヨークさんのお気持ちはお察ししますが、ジェーンさんは私達を無償で馬車に乗せてくださいました。いろいろ問題はある方ですが、今は私達の仲間です。恩を返さなくてはいけません」

シャルナは翔子をひとりにするのにためらいがあったが、それを表には出さなかった。

翔子の気持はシャルナも痛いほど経験してきたからだ。

おまけに、翔子が恐れていた危険や死への恐怖など一切感じられなかった。

「簡単には死にません」

シャルナは昨夜と同じことをしっかりとした口調で言い放ち、翔子の手を握った。

「シャルナさんは……」

翔子がそう言いかけ顔を上げた時には、シャルナの姿はもうなかった。

翔子とシャルナの位置からは、もはやジェーンと巨大な鳥の姿は見えなくなっていた。

シャルナは馬車を飛び降り、だんだん遠く離れていく馬車を見つめていた。

翔子が無事であるように……

そして、シャルナが地面に靴が埋まるというくらい強く脚を踏みしめると、サーッと涼しげな風が、平原の草々を揺らした。

そして、まるで足元から風が出ているようにシャルナのローブや髪は風と共に舞う。

風は次第に弱くなり、揺れていた草々は一斉に動きを止めた。シャルナの姿はもうそこにはなかった。

「ピンチ」

ジェーンは巨大な鳥の脚に掴まれて、身動きが取れなくなっていた。

「どこまで連れてく気だよ……」

もがけばもがく程、鳥の脚はジェーンの肉体に杭込む程強くなる。

「くそぉ……」

これ以上強まれば、巨大な鳥の大きく鋭い爪が、ジェーンのちょうどみぞおちに突き刺さってしまいそうなくらいだ。

なんとかして、逃げられる方法を、ジェーンは鳥の脚に掴まれ空高く舞い上がったまま、脳味噌をフル回転させて考えてた。

だが、こんな状況の中で、なかなか良いアイディアは浮かんでこない。

おそらく巨大な鳥はジェーンを餌にしようとしているのだろう。

それならば早くなんとかしてはいけないのだが、もうそんなに時間はなさそうだ。

前方にはラース平原とセル荒野の間に位置する『底無しの谷』と呼ばれる谷間が見えた。

底はかなり深く、深さがまだわかっていないため、その名が付いたといわれている。

その谷間の岩には、様々な種類の鳥類が生息し、この巨大な鳥もおそらくあそこに巣があるのだろう。

巣まで連れていかれたら、後はヒナの餌食になるのみだ。

「俺なんか食ったら下痢になっちまうぞ！」

ジェーンがそう大声で叫んだとき、ものすごい向風が吹いてきて、巨大な鳥は「キー」と耳障りな声をあげ、大きくバランスを崩した。

ジェーンは体が宙に浮いたような感覚にみまわれた。
鳥はジェーンを脚から離してしまったのだ。

一瞬、助かったと安心したが、それはすぐに間違いだと気付いた。下を見ると、地面が遠く見え、周りは白い霧が立ち込めている。巨大な鳥はとても高く飛んでいたのだ。鳥からは逃げられても、この高さ落ちたら助からない。

だが、ジェーンは自分があと数秒で死んでしまうという気がしなかった。

空高くから見るライス平原はピンチにも関わらず、見とれてしまう程美しく、向風はどこか懐かしい感じがしたからだ。

体は真っ直ぐ地面に落ちていくのではなく、風に乗り、空を漂っているような感じだった。

ジェーンはそのまま何か乗り物にでも乗っているかのように、ゆっくりと着地した。

「キシヤー」

まだ諦めてはいないのか、巨大な鳥は上空から勘高い声をあげてせまってくる。

ジェーンは逃げようと立ち上がろうとしたが、しばらく上空を猛スピードで移動したためか、フラフラして足が思うように動かない。

助かったと思ったのも束の間、巨大な鳥はすごいスピードでジェーンに迫ってくる。

こうなってしまったら、ジェーンの頭では、もう戦うことしか考えることができなかった。ジェーンが剣を抜こうとしたとき、誰かがジェーンの腕を掴んだ。

「早く逃げましょう！」

「あ、姉さん！」

それはシャルナだった。

シャルナがジェーンの腕を引くと、フラフラだったジェーンはフワッと何かに押されたように軽々立ち上がることができた。

シャルナはジェーンの手を引いて走った。

今までに走ったことがないほどのスピードで、ジェーンは走っているようだった。

だが、巨大な鳥は更に甲高くけたたましい声をあげて、二人との距離はだんだん狭くなる。ジェーンはたびたび後ろを振り向いた。

「気にするとまた捕まってしまいますよ」

シャルナは真っ直ぐ前を向いたまま言った。

「じゃあ、どうしろっていうんだよ」

ジェーンはシャルナの言ったことには耳にもくれず、鳥が気になっ
て仕方がない。

「このままだと追い付かれちゃう！」

助けが来ても騒ぎ立てるジェーンを、シャルナはちらつと横目で見た。

「ジェーンさんは、戦うしかないとおっしゃりたいのですか？」

「そうだ！」

ジェーンはそうだとばかりに、シャルナがつかんでいた腕を、引き止めるようにつかみ返した。

「私も同意見です」

そんなジェーンの行動に反応もせず、シャルナは言い放った。

「じゃあ、何で逃げてばかりなんだよ」

ジェーンはもつと強く、シャルナの腕を強く引っ張った。
自分と全くタイプが違うシャルナと意見があったことが、実は嬉しかったからだ。

そのことをシャルナに悟られないようにするための、ジェーンなりの無器用な方法だった。シャルナは気が付いているのだろうか。

「チャンスを待つのです」

「は？まだ戦わねえ気か？」

戦うしかないという考えは同じのようだが、どうやらシャルナと

ジェーンでは、戦法が全く違うようだ。

「相手の隙を待つのです」

「姉さんよりは隙ありそうだな」

ジェーンはシャルナがずっと前を見ているため、おそらく後ろから襲われても、気配でわかるのだろうと悟ったので、今はシャルナに従おうとジェーンは決めた。

いつも自分が一番なジェーンにしては、良い判断だった。

しかし、やはり迫り来る巨大な鳥が気になり、後ろをちらりと振り返ってしまった。

すぐ目の前に、巨大な鳥の大きなクチバシが、ジェーンの顔に触れるか触れないかというほど間近にあった。

それと同時に、シャルナは翔子に見せた剣を抜いて、ジェーンの腕から手が離れた。

シャルナは遠くから狙っても空へ逃げられてしまうので、近くまでくるのを狙っていたのだ。

今までシャルナに支えられて走っていたのと、驚きにより、ジェーンは後ろによるめいた。シャルナはすぐさま振り向いて、剣を振るった。

シュツと斬れの良い音がした。

巨大な鳥は、すばやく後ろへ引いたが、剣の刃先が目をしとめていた。

鳥の右目は潰れ、血が吹き出した。

「キシヤー！」

巨大な鳥は、鼓膜が破れそうなほど、鳴き叫んで、もがいた。

「すげえ声……」

ジェーンは両手で耳を塞いで、その場に立ち尽くした。

「ジェーンさん、剣をぬくのです！」

シャルナはそう言って、巨大な鳥が痛みで頭を振るうのを狙って、巨大な鳥の頭上にとび乗った。

とび乗るシャルナを見たジェーンは、意をけして両手を離し、剣を抜いた。

「くたばれ化け物！」

鳥の口が開くときを狙って、ジェーンは口の中に飛び込んで鳥の舌を斬った。

何かが潰れるような、鈍い音をたてて血が飛び散り、鳥の顔を途端に紅く染めた。

返り血を浴びてジェーンの服も紅く染まる。

巨大な鳥は舌を斬られて声が出ず、もがき苦しんだ。

シャルナはふりおとされないように、頭の羽毛をしっかりと握りしめた。

すると、飛び乗ったばかりの時よりも熱くなっているように感じた。

今でもだんだん熱さは増している。

頭の中央に集中しているようだ。

だが、それだけではない。

最初は微量だった魔力も強さを増している。

「早く鳥の死角へ！」

ふりこのように揺れている鳥の頭をよけながら、ジェーンはシャルナの声聞きとった。

ジェーンには何が起ころうとしているのかわからなかったが、シャルナの声から死角に入らないとヤバイということは十分に伝わった。

ジェーンは鳥の羽根の影に逃げ込もうとした。

その時、鳥の頭は大きく揺れ、ジェーンは数十メートル跳ばされた。

巨大な鳥の頭上はますます熱を増し、シャルナは乗っていられないほどになった。

滑り台を滑るように、シャルナは鳥の首を滑り降りた。

首と胴体の間までくると、そこは頭上よりも更に熱をおびていた。

「姉さん！」

鳥のちょうど尾羽根の方角から、ジェーンが走ってきた。

飛ばされて腰を打ったのか、足を少し引きずっていた。

「早く死角へ！」

シャルナは鳥の首を強く絞めながら叫んだ。

巨大な鳥は声にならない声をあげて、ますます激しくもがいてい

る。

「何か起こるのか？」

ジェーンは今度はシャルナの言うことをちゃんと聞き取れた。
ジェーンは死角に隠れることよりも、シャルナを助け出そうと考えていた。

「この鳥、火を吹きます！」

この一言でジェーンの考えは吹き飛んだ。
できるだけ姿勢を低くし、足を速めて巨大な鳥の大きな翼の影へと急いだ。

一方で鳥の体温はどんどん増してきていた。
シャルナはもう限界になり、羽根を上手く滑り降り死角へと逃げ込んだ。

ジェーンはあと少しでシャルナのいる羽根の下まで辿り着こうしていた。

しかし、もう間に合いそうになかった……

巨大な鳥は動きを止めた。

シャルナは手でジェーンに『待った』の合図を送る。

下手に音を立てれば、炎の餌食になってしまう。

ジェーンは緊張した面持ちで鳥を見つめ、額からは冷や汗が流れていた。

シャルナは翔子と別れたばかりの時と同じように、地面に足を踏みしめた。

緊迫した雰囲気と和ますように、爽やかな風が吹きはじめた。

その時、その風に乗るように、何かが走ってくる音が聞こえてきた……

そんなに遠くはない……

「……ガキだ」

ジェーンの視線に入ったのは、シャルナと鳥の向こう側から走ってくる馬車の姿だった……

「……来てはいけません！」

まさかと思いシャルナが飛び出した時にはもう遅かった。

巨大な鳥は頭を振り上げ、馬車に向かって、大きな口から消火器のように炎を吹き出した。

爽やかな風は、まるで炎の方角を変えようとするかのように強くなった……

「勇気と決意」

「……！」

翔子は言葉を失った……

見てしまった……

巨大な鳥が火を吹く瞬間を……

シャルナが自分を助けようと走ってくるのが見えた。

だが、もう何も思わなかった。

あまりの恐ろしさに、ただ漠然と見ていることしかできなかった。
逃げることもさえも忘れかけていた……

……翔子がシャルナと別れたばかりの頃、慣れない手付きでたずなをにぎりながら、翔子はサンクルナへ向かっていた。

一人のせいにか、馬車のきしむ音がより耳に入ってきたが、あまり気にならなかった。

『また行っちゃった……』

一人の寂しさと不安のほうが大きかった。

無理矢理でも追い掛ければ良かったと今更後悔してしまう。
シャルナと出会った時やジェーンのムカつく態度が、まだ少しの
付き合いしかしていないのに頭に浮かぶ。

二人は無事だろうか。

助かったとしても、どうやって馬車を見つけるのだろうか。

もし、このまま戻って来なかったらどうすれば良いのだろうか。

翔子はまだ会っていないが、魔族に襲われたら……

そんなことを考えながら、漠然と時間は過ぎていき、空は綺麗な
オレンジ色に変わりかけていた。

「ずっと走ってたから、休憩しようか」

翔子がそう言うと、クリスティーヌとローランドは足を止めた。

それにしても周り一面ただっ広い草原だ。

人の気配もなければ、身を隠す場所さえない。

この環境で万が一、あの鳥が現れたら、死を覚悟しなくてはなら
ない。

そんな恐怖が一瞬頭をよぎったが、翔子はそれを封印した。

考えてはいけないことだ。

巨大な鳥が再び現れたということは、シャルナとジェーンの死を
意味しているからだ……

『とりあえず寝よう。そしたらおかしいこと考えずに済むし、もし
かしたら二人が戻って来るかもしれない』

翔子は自分にそう言い聞かせながら、ひんやりと冷たい腰掛けに
横になり目を閉じた。

だが、なかなか落ち着くことができない。
静か過ぎるのだ。

馬が動いたり、鼻を鳴らしたりする音。

風で馬車が揺れる音が時々聞こえて来るくらいで、耳元で風の吹く音がほぼ鳴り響いている。

翔子の住む東京では、こんな音は聞こえない。
車やバイクのエンジン音が一日中聞こえて来る。

きっとこの風の音は静かな証拠なんだ。

と、翔子は思いながら小さな腰掛けの上で、もぞもぞと落ち着きなく動いている。

横になってどのくらい経ったのかはわからないが、翔子は我慢出来なくなり、起き上がった。

まだそんなに時間はたっていないようだった。
オレンジ色の空は少し濃くなり、薄暗くなっていた。
風の音は相変わらず耳の中で響いている。

『やっぱり行かなくちゃ』

もうすぐ夜がやって来る。

映画や小説の中ではこういう場合、夜になると何かに襲われるケースがほとんどだ。

ここだって地球じゃない、その可能性は十分ある。

翔子と馬二匹ではどうにもできない。

やっぱりシャルナとジェーンを探すしかない！その途中でもし何かに襲われても、じっとして死ぬのを待っているよりマシだ。

翔子は頭の中で勝手に解釈を進めると、たずなを強く握りしめた。

「さあ、早く行くよ。全力で走って」

夜が来たら辺りは暗闇に覆われてしまう……
その前に二人を見つけて……

翔子は賢明にたずなを打ち続けた。

馬のお尻に当たらず空を切ってしまったが、翔子の気持が伝わったのか、馬も翔子と同じ気持ちだったのか、馬は必死に走っているように翔子は感じた。

馬はまるで何かに押されているかのように、どんどんスピードを上げていった。

「わあ！早いよあー」

初めからたずなの引きかたなどわかっていなかったが、今ではコントロールが効かないことは明らかだった。

たずなは今にもちぎれそうなくらい張っている。

だが、馬の様子は巨大な鳥から逃げる時とは違っているように感じた。

行く場所が決まっているかのように、焦点は真っ直ぐに定まっている。

翔子は降り落とされないように、しっかりとたずなを握り締めた。初めは恐かった揺れも、今ではあまり気にならなくなっていた。

『もしかしたら二人の所へ連れて行ってくれるかもしれない』

翔子がそう思い出した時だった。

「キシヤー！」

耳を貫くような鳴き声が草原中をこだました。
鳴き声はどんどん大きくなっていく。

『またあの鳥だ』

翔子の視界にはオレンジ色の巨大な鳥がいた。
だが、今度は馬は逃げることなく、鳥に向かって真っ直ぐ走り続けていく。

翔子はシャルナとジェーンを探そうと試みたが、馬車のスピードが速すぎると巨大な鳥への恐怖から、そんな余裕はなかった。
だが、鳥の様子は昼間と少し違う。
頭を降り、苦しそうだ。

『もしかしてさっきのとは違うんじゃない……』

翔子がそう思ったときだった。

「来てはいけません！」

聞いたことのある声が聞こえて来た。

それと共に鳥の口から見たこともない程の炎が吹き出すのを見た。

「シャルナの力」

助けられてばかりではいけない……

そう思ってここまでやってきた。

だが、実際はどうだろうか。

助けに来たのに……

助けに来たのに……

迫りくる炎に言葉を失い、シャルナは翔子を助けようとして、あと少少で炎に飲まれそうになっている……

ジェーンは巨大な鳥を止めようと走りだし、片足を斬り落とした。

巨大な鳥は平原の草を真紅に染めあげ倒れこむ。

だが、もう遅かった……

炎はシャルナを飲み込もうとしていた……

翔子は目をふせ、ジェーンは何か叫んでいたが、炎の燃え盛る音で何を言ったのかは聞こえなかった。

ゴーツ……

翔子は目はつぶっていたが、炎が燃え盛っている音を聞いた。
シャルナは……どうなってしまったのだろうか……

「簡単には死にませんよ」

シャルナの言葉が翔子の頭をよぎった。
だが、いくらなんでもあんな炎に包まれて、助かるはずがない……
それともまた何か魔法を使ったのだろうか。
あの音は、魔法の音だったのだろうか……

そうだと願って翔子はゆっくりと目を開いた……

目の前にはジェーンが目を見開いて立っていた。

二頭の馬は、ジェーンに駆け寄り、顔を舐め回したが、ジェーンは
呆然と立ち尽くしているだけだった。

翔子はジェーンの目線の先を見る。

巨大な鳥が倒れている向こう側に、シャルナが立っていた。
炎はシャルナの足元に、少し燃えているだけだった。
強い風は、また爽やかな風へと戻っていく。

「……シャ、シャルナさん！」

翔子は馬車から飛び降りてシャルナに飛びついた。

「し、死んじやったのかと思ったよう！」

翔子は思い切りシャルナにしがみついた。
目からは自然と涙が溢れ出してきた。

「約束は守りますよ」

シャルナはそう言つて両手を翔子の肩にそつとそえた。
「助けに来たのに、私何もできなくて……」

翔子の目からますます涙が溢れ出してくる。

翔子は自分が嫌になる……

どうしてシャルナばかり危険なめに遭うのだろう……
もし自分のせいでシャルナが死んでしまったら……
翔子のそんな思いがますます強くなっていく……

翔子はシャルナにもたれかかり泣き崩れてしまった。

一方でジェーンはただ茫然と二人を見ているだけだった。
馬に顔を舐め回されても、何の反応もない……

シャルナは翔子の涙を拭いて支えながら、ジェーンを見た。
二人は見つめ合っているだけで、何も話さない。
平原に響き渡っているのは、翔子の泣く声と、爽やかな風の音だけだった……

「俺の親父は、勇者だったんだ……」

ジェーンが呟いた。

「親父も風の魔法使ってた。でも、風を操れる人はそういないって」

「……」

シャルナは何も言わない……

「姉さん、一体何者なんだ？」

風の魔法は、人間では数えるほどしか使えないと言われていたため、ジェーンはシャルナが父親を知っているのではないかと思った。

「私はただの旅人です……」

呟くようにシャルナは言った。

翔子は何が何だかよくわからなかった。

ただみんな無事だったことが嬉しく思っていた。

しかし、この二人のムードは何なのだろう。

ただ自分と同じような気持ちでは到底ないことはわかる。

「ね、ねえ！」

この雰囲気少しでも明るくしようと、翔子は二人の間に割り込んだ。

「何だよ」

少し苛付いた口調でジェーンが言った。

ただ顔はしっかりとシャルナの方を向いている。

シャルナは目線をチラリと翔子に向けたが、すぐにジェーンに戻った。

「皆助かったんだから、いいじゃん。早く何とかって所に行こうよ」

涙を制服の袖で拭きながら翔子は言った。
馬も翔子の言うとうりだとしても言うように、ブンっと鼻を鳴らした。

「サンクルナへですか？」

シャルナがジェーンから翔子へと完全に視線を変えた。
心の中を見透かすような表情が、普通の優しい表情に戻っている。

「う、うん」

涙で濡れた袖を少しでも乾かそうと、クシャクシャに擦りあわせながら翔子は頷いた。

「じゃあ、とつとと行くぞ」

ジェーンは早歩きで馬車まで行くと、運転席に思い切り腰掛けた。
馬車はギシッと潰れそうな音を立てた。

シャルナは黙って馬車へ向かった。

シャルナが退くと、巨大な鳥の無惨な姿があらわになる。
それを見た翔子はそのまま立ち尽してしまった。目は焦点が合わず、口元は微かに震えている。

翔子の瞳の先には鳥の目は潰れ、脚の指は斬られ、あちこちに傷があり、血まみれになった巨大な鳥の姿があった。

鳥から半径一メートル程の草は、真っ赤に染まっている。

「あ、あ……」

声が言葉にならない。

ゴキブリやらネズミの死体を見たときは、凄まじい奇声を上げていたが、これはそれ以上だ。

「この鳥は私達を襲いました。このような方法しかなかったのです」

翔子の脅えた様子に気付いたシャルナは翔子の方へ戻った。
鳥を隠すように、翔子の前に立つ。

「いきましょう」

翔子はゆっくり馬車へと歩いた。
鳥のことは忘れ、二人が無事だった喜びだけを頭に浮かべようとする。

だが、そんなに簡単にはいかない。

あの傷がシャルナとジェーンがやったものだと思うと恐ろしくてたまらなかった。

森で起こった光景が、翔子の頭の中を駆け巡る。

そう、あの森で撃たれた親子の光景だった。

足が震えている。

前に進まない……

ジェーンはたずなを引き、馬車はゆっくりと翔子へ近づいた。

「早く乗れよ」

ジェーンはぶっきら棒に言った。

そしてシャルナに真っ直ぐ視線を送った。

翔子とシャルナが何か隠していることはわかっている。

「まだ何か？」

シャルナはジェーンと同じくらいぶっきら棒に言い放った。
何を聞かれても話しませんよ、とでも言わんばかりだ。

「二人共、まだ会って間もないだろ？」

ジェーンの口調は苛ついている。

「隠したって無駄だぞ。ガキのことわかってたら、鳥を見せないようにするはずだろ？」

シャルナは翔子を見た。

翔子が違う世界からやってきたことを話していいかどうか、返答が欲しいようだ。

「自分で話すよ」

翔子の焦点はやっと合ってきたようで、ゆっくり顔を上げた。

「此処もう暗いし、中で話そうよ」

声は小さいが、口調ははっきりしている。

翔子はシャルナの手を振りほどいてさっさと馬車に乗り込んだ。

ジェーンは二つのランプに明かりを灯すと、一つを後ろへ放り投

げた。

いくらガラスの中とはいえ、火が入っているものをいきなり投げられ、翔子は思わず避けてしまった。

シャルナがキャッチしていなかったら、馬車は今頃黒焦げだろう。

「危ないじゃん」

黙っていれば言い争いにならないことを知っていながら、翔子はつい口に出してしまう。

シャルナは朝のような言い争いが起こるのではないかと思い、何か言いかけようとした時、ジェーンが口を開いた。

「もう一人が取るからいんだよ」

ジェーンは横目でキツとシャルナを睨んだ。

今度はシャルナに喧嘩を売るつもりらしい。

シャルナが自分の知りたいことを話さないのが気に食わないのだ。シャルナはジェーンの状態を知っていながら、何も言おうとはしなかった。

「ま、まずはあたしから」

ジェーンの気分を少しでも良くしようと、翔子が話し始める。

「あたし実はね、あ、話してもいいよね？」

本当に話して良いのだろうか？

話してまた狙われたりしないか翔子は一瞬不安になった。

シャルナはどう思うだろうか。

目線をゆっくり横へとそらした。

「良いと思いますよ」

目線しか向けていないのに、シャルナは翔子が訴えていることを理解しているようだった。

「良いんだよ。言えば」

ジェーンはますます苛ついている。

言葉では冷静さを保とうとしているが、背中が冷静ではないオーラを完璧に放っていた。

その時、翔子は思った。

『この人なら大丈夫』

理由は簡単。

ジェーンはただ単純な男だと気付いたからだ。

ジェーンは気怒哀楽が激しい。

こんなにわかりやすい人が悪人であるはずがないと思ったのだ。

それに今更気が付いた翔子は、もっと単純ということになるのだが。

そう思うと今まで脅えていた翔子の声に、少し生気がみなぎってきた。

「あのね、あたしこの世界の人間じゃないんだ」

「は？」

翔子はこちらに引き付けるように、わざと早口で言った。

予想もしていなかった翔子の言葉に、ジェーンは信じ難いようだ。

「この世界に似合わない名前と格好でわかるでしょ」

「姉さんもか？」

「シャルナさんは違うよ」

「じゃあ、何で言葉が通じるんだ？」

ジェーンは思考が着いていかない。

確かに翔子の風貌や様子から、この世界のものでないと言われて納得はできるが、どうやってここに来たのか想像もつかない。

だいたい他の世界にも人間はいるのだろうか。

「どこから来たんだよ？」

ジェーンの苛つきは少し落ち着いたようだ。

「地球だよ。言葉がわかるのはシャルナさんの魔法だよ」

翔子は続ける。

「シャルナさんの話しでは、地球はここから凄く離れてるんだって。でも地球には、あんなおっきい鳥いないよ」

「じゃあ、神族や魔族はいないのか？」

魔族……そう口にした時、ジェーンの顔は激しく歪んだ。

シャルナはその瞬間を見逃さなかった。

「いない。それは物語の中の世界だけ」

「じゃあ、ここはショーコちゃんの世界では物語？」

「うん。でも夢だから……………」

翔子は未だにこの世界で起こった出来事を夢だと思っている。
だが、こんなリアルな夢は初めてだ。

まるで本当にこの世界は存在している気がする。

証拠はないが、そんな気がしてならない。

それに、ずっと離れないあの言葉。

「夢の中で」

『時は来た。ルイス＝マリアルとジョイス＝オッドリアを探しなさい』

夢の中で見た夢。

あの、白くて美しい女性は誰なのだろう。

でも、何処かで会ったことがある気がする。

それが何処なのかはわからないけれど。

—— あれは神様だ。

間違いない。

神様がいるなんて証拠はない。

だけど、あれは神様が私に話しかけていたんだ。

この世界にいるのだろうか。

ルイス＝マリアルとジョイス＝オッドリアも。

この二人に会うために、私はこの世界に来たんだろうか。

だとしたら、これは夢じゃない。

きつと私は――

「おい！」

どのくらい夢のことを考えていたのだろうか。
ジェーンの大声で、翔子は我に返った。

「話しの途中にいきなり考え込むんじゃ――」

「ねえ、神様っているの？」

ジェーンの言葉を遮り、翔子は唐突に質問した。

「はあ？」

ジェーンのこめかみにますますしわが寄る。

「神様は神の国にいますと言われているんですが」

夢じゃないかもしれないと思い始めた翔子や、苛ついたジェーンとは違い、シャルナはいつもと変わらない冷静な表情を浮かべている。

「神様を信じてんのか？」

数秒ごとにジェーンの苛々は増していく。
何故そんなに苛々しなくてはならないのか、シャルナは不思議でならなかった。

「私は信じていますよ」

シャルナは堂々と言う。

キリスト教のような宗教が、この世界にもあるのだろうか。あつたとしたら、シャルナは間違いなく信者だろう。

それに比べ、ジェーンは宗教など全く信じるタイプではなさそう
だ。

というより、興味さえなさそうだ。

「馬鹿か？神族なんて見たことある奴いねえんだぞ。俺は信じねえ
な」

ジェーンはシャルナの意見を完璧にけなしている。

「信じる信じないは自由じゃん」

シャルナに否定ばかりするジェーンに、翔子は少し腹が立ってきた。
た。

「自分の考えを人に押し付けるなんて、最低の男のやることだよ」

翔子はだんだんヒートアップしていく。

声も徐々にボリュームを増してくる。

「最低？俺がか？」

「他に誰がいるの？」

「黙れ！ガキめ！」

翔子のジェーンの声は草原中に響き渡っている。
シャルナは黙っていたが、実は笑いを堪えるのに必死だったとは、
二人は気が付いていなかった。

あれからしばらく二人の言い争いは続いていた。
シャルナは二人の声でまた何かやってこないか少し心配だったが、
その必要は全くなく、虫や小動物の姿さえも見掛けなかった。
今はもう深夜だろうか。

気温も昼間の心地よい陽気と違いすっかり寒くなった。
無数の星達が真つ暗な空を明るく照らしている。

もちろん、月など見えるはずはない。
シャルナは未知なる星達が輝く夜空を、割れたガラスの間からず
っと見ていた。

翔子は寒さと疲れからか、今はすっかりおとなしくなり、ジェー
ンが用意した毛布にくるまって寝てしまっている。

ジェーンは睡魔に襲われるのを忘れるため、葉巻きを吸い続けて
いた。

もうポイ捨てはしていない。

手元に置いた錆び果てた缶に、葉巻きが山盛りになっている。
彼なりに悪いと思っているのだろう。

「起きてるか？」

寝ている翔子を気遣いながら、小声でジェーンが言った。

「はい」

シャルナはまだ星を見ながら、ジェーンより小声で返事をした。

「ガキは寝てるし、そろそろ姉さんのことも教えてくれたっていいだろう？」

「ジェーンさんの知りたいこと、私は何も知らないと思いますよ」

「俺の知りたいことわかるのか？」

ジェーンは缶に葉巻きを押し付ける。

「……ケイル」マクレラン」

シャルナは強弱もなくその名前を口にした。

「相変わらず有名人だな。親父は」

ジェーンは軽く微笑むと、薄汚れたズボンのポケットから、葉巻きを取り出した。

片手で軽々とマッチに火を付け、葉巻きに灯し、シャルナから話すのを待つ。

「15年前、魔獣から人間を救ったと言われている英雄。しかし、その後は行方不明」

シャルナは淡々とケイルについて知っていることを話した。

「良く知ってるじゃねか」

ジェーンは何か聞き出そうと期待した。

「申し訳ないですが、期待答えることはできません。あのくらいならほとんどの方が知ってるはずです。私もそれ以上は知りませんよ」

「ちっ」

ジェーンは少し苛立、いや、今度は悔しそうに缶に葉巻きを押し付けた。

シャルナはその様子を横目でじっと見つめている。

「じゃあ、他のこと教えろよ」

「何をですか？」

シャルナは視線を夜空へ戻す。

「姉さん自身のことが知りたい」

ジェーンは葉巻きを吸おうとしない。

彼はシャルナに背を向けていた。

だが、彼女は彼が真面目に言っているのだということがわかった。

おそらく葉巻きを吸わずまっすぐ前を向いている時が、彼が真剣な時なのだろう。

シャルナも視線を夜空からジェーンへと変えた。

その視線がジェーンにも伝わったのか、彼の背筋に緊張が走る。

「誰に剣を習った？」

ジェーンは緊張から、声が少し震えている。
彼の聞きたい返事はわかつている。

『ケイルⅡマクレラン』

しかし、シャルナの口から出たのは、ジェーンの聞いたことのない名だった。

「ミケランドⅡコンティクスというお方です」

シャルナは静かな風の音だけ響く、草原の真っ只中でも、耳を傾けなくては聞き取れない程の小声で答えた。

「本当か？」

ジェーンの期待していた返事ではない。
シャルナを疑うわけではないが信じたくなかった。

「信じないのならそれで構いませんが」

シャルナは、はっきり言い放った。
どうやら嘘ではないらしい。

「そいつも風の魔法使えるのか？」

疑って悪そうにジェーンが言った。

「いいえ。風の魔法は突然使えるようになったんです。何故かは私もよくわかりませんが」

シャルナは次にジェーンが知りたがっていた質問の答えまで、淡々と答えた。

「そっか……」

ジェーンはそれから何も聞かなかった。

シャルナはジェーンに聞こえないように、小さく溜め息をついた。他に聞かれないことがあったかのように……しかし、それがわかるのは彼女だけである。

それからお互い何も話さなかった。

翔子の寝息が聞こえるほど周りは静まり帰っている。今は何時頃だろうか。

ジェーンはズボンのお尻のポケットから、古びた懐中時計をとり出した。

落としたら落ちそうな程ぐらぐらな針、見えなかった数字と、とても年忌が入っている。

おまけに細かい傷もところどころ目立っていた。時計の針はまもなく深夜の2時を指そうとしている。

ジェーンはもう限界だった。

巨大な鳥と戦った疲れが、すっかりたまっていた。服にこびりついた鳥の血がそれを物話っている。

しかし、こんな場所で馬車を止めたりしてまた何かに襲われたらやられてしまうに違いない。

シャルナだつて顔には出さないが、疲れているだろう。

それに今度は翔子も守らなくてはいけない。

複数で攻められればひとたまりもないはずだ。

「無償のわりにハードな仕事だぜ。やっかいな客に関わっちまった

な」

そう言いつつも彼は微笑みを浮かべていた。

彼は巨大な鳥が現れてから、二週間どころではなく、当分は三人で行動することになるだろうと覚悟していた。

彼はこの平原を何度も通っているが、とても穏やかで、小動物や昆虫、小型の鳥類などしか見たことがなく、巨大な生物が生息していれば、すぐに噂になるはずだ。

彼が巨大な鳥の噂を聞いたのは翔子達と出会う三日前だった。

しばらく村で様子を伺い、村の近くに現れたら一人で退治して手柄を立てるはずだった。

だから翔子達を乗せ、巨大な鳥から守ったお礼を貰おうと考えていた。

剣の腕には自信あったし、巨大な鳥は実在した。

しかし、守るところか助けられてしまった。

シャルナに……

ジェーンは悔しさよりも彼女の強さに興味があった。

鳥から逃げるときはどこか懐かしかったあの風も、シャルナが使った魔法だろう。

父親も風の魔法を使っていたため、そう感じたに違いない。

これで謎は一つ解ける。

では、何故風の魔法が使えるのか、父親も何処で覚えてきたのかはわからない。

魔族には様々な魔法の特性あり、体質にあったものなら自然と身につくものらしいが、人間でも魔力に長けていれば、自然と身につくものだろうか。

シャルナは知らないうちに身についていたと言っていたのは本当

なのだろうか。

それが本当だとしたら、シャルナは本当にジェーンの父親を知らないはずだろう。

ジェーンはふだんあまり使わない脳味噌をふんだんに振り絞って考えた。

あまりにも気になることが多すぎる……

シャルナが放った『ミケランドロコンティクス』という名も何か引っかけか。

何処かで耳にしたことがあるが、それが全く思い出せなかった。

シャルナはこの人居所を知っているのだろうか。

そうしたら疑問は全て解ける気がした。

「思惑」

シャルナに聞いてみようか。

このままいくと頭がパンクして、いつのまにか居眠りしそうな勢いだったため、ジェーンは少しずつ思考していくことにする。

彼女は知っていたとしてもおそらく、何も答えないに違いないだろう。

本当に知らないという可能性もあるが、それはまずない気がする。彼のふだんは冴えない勘が、今度とばかりは間違いないと言っている気がした。

しかし、もうそれ以上のことは浮かんて来なかった。

このまま一緒に行動して危険にさらされようとジェーンは構わない。

むしろ、この世界にまだ慣れていない翔子のほうがずっと心配だ。彼女は剣も魔法も扱えず、自分を守る術がない。

大勢の魔族に囲まれたら、守りきるのはほぼ不可能だ。

魔族は下級兵士でも、人間の国ではそれなりに鍛えられていなくて立ち打ちできず、それ以上はまともに戦える人間はそういない。ジェーンが見るからにシャルナはそういう人間の一人に違いない。自分もそこそこ戦える自信はある。

彼は戦いたかった。

戦って仇を打ちたい。

家族の仇を……

そして父親に“復讐”するのだ。

だから、剣を学んだ。

“強くなる”と心に誓った。

そのためには犠牲にならなくてはいけない者が必ずいる。
自分がそうなるのだけは真っ平だ。

認めるのは悔しいが、シャルナは強い。

自分よりも――

女性を巻き込むのは気が乗らないが、彼女程強い人間にはそう簡単にお目にかかれないだろう。

彼女なら巻き込まれても対処でき、翔子も守り抜けるはずだ。
というより、自分で翔子のことに関わっていったではないか。

何故やって来たのかわからない謎の少女と、強さを備えた謎の女性剣士……

きつとどこかで父親と繋がっている。

父親も謎が多く、口数も少なかった。

謎の多い者同士が関係のないはずはない。

このまま三人で行動しよう。

一体どう考えたらこのような結論になるのかはわからないが、ジエーンは勝手に三人で行動することに決めた。

サンクルナへ無事に到着しても、何らか言い掛かりをつけて着いていくつもりだ。

二人も隠していることは必ずと言える程まだあるはずなので、このことは伏せておくことにした。

ジエーンが改めてそう決意した時だった。

ガタン！

何かが落ちたような音が後ろから響いてきた。

「姉さん？」

ジェーンが振り向くと、翔子がお尻を抱えて中腰状態になっていた。

「痛い……」

翔子は寝返りにより椅子から落ちたようだ。
その時にお尻を打っただけらしい。

「バーカ」

ジェーンはいやらしい微笑みを浮かべて言った。

「な、何よお」

翔子は恥ずかしそうに、少しうつむいている。

「こんな時によく寝ていられるな」

「だって、凄く疲れたんだもん。二人は寝てないの？」

「俺は寝れるわけねえだろ。隣見てみるよ」

ジェーンはシャルナを指さした。

シャルナは椅子に姿勢良く腰掛けたまま、目を閉じていた。

「あ、寝てるう」

翔子はそう言いながら、眠そうに目を擦っている。

「ったく、何考えてんのかわかんねえ女だぜ」

そう言うジェーンの顔は、何故か生き生きとしていた。

「あたしは、良い人だと思うな」

「証拠は？」

ジェーンは嫌味につっかかる。

「あたしを命懸けで助けてくれたもん。さっきだってそうでしょ」

「だからって良い人だとは限らないだろ」

ジェーンの口調はまただんだん強くなる。

“良い人だと決めつけてはいけない”

いつか裏切られる時は必ず来るのだから。

少なくとも彼は何度裏切りにあっただろうか。

そう思うと、つい熱くなってしまう。

「俺に会う前は何もなかったのか？」

ジェーンは少し声を潜めた。
強く言ったら答えてくれないだろう。

「何もって？」

せつかく気を使ったのに翔子は彼の言ったことをよくわからないらしい。

「本当にバカだな」

ジェーンは深いため息をついた。
翔子は何も言い返さなかったが、顔はムツとしている。

「誰かに襲われたりしなかったか聞いてんだよ」

ジェーンはしぶしぶ言った。

その時、翔子の顔色が変わった。
薄ピンク色の頬が、みるみるうちに血の気が引いていくのがわかる。

「バカはそっち……」

翔子は小さい声でそういうと、うつむいて震えだした。
忘れかけていた記憶、森でのあの光景が頭の中で蘇る。

親子の胸から血が飛び散る瞬間――

殺人の瞬間――

そして、自分と歳があまり変わらないであろう、細身の青年の、

冷たい瞳……

その恐ろしさに体は動かない……

痛みも感じないほど、撃たれた肩は重く、機能しなかった。

「思い出したくない！もうあんな目に会いたくない！」

翔子は大声でそう言いながら頭を抱え、床に倒れ込んだ。

「思い出さなくて結構ですよ」

いつ起きたのか、シャルナは翔子をそっと抱き起こした。

翔子はシャルナの胸に顔を埋めてきつく抱き付き、震えている。

「いつ起きたんだ？」

ジェーンは翔子のことより、シャルナがいつ起きたのか気になるようだ。

「眠っていませんよ」

今までの会話を全て聞いていましたよ、というように、シャルナは軽く微笑んだ。

二人の会話を全て聞いていたに違いない。

ジェーンがシャルナを信用していないということも。

もし……

もし……

もし、シャルナが裏切り者だったら？

ジェーンは、ふとそんなことを考える。

翔子の反応からして恐ろしい目にあつたのは間違いない。

その原因がもし、シャルナだとしたら？

翔子はどうなるかはわからないが、必ず恐ろしい目に合うに違いない。

そして、おそらく自分の命はない……

「神の存在」

シャルナにかなわなければ父親にかなうはずがない。

父親は勇者だ。

名もない旅人に負けるはずがない。

強さが欲しい。

誰にも負けない強さを……

「ヒヒーン！」

ジェーンはたずなを思いっきり引つ張った。

二頭の馬は前足を挙げて、スピードを上げていく。

シャルナはさっきまで呆然としていたジェーンを気にしながら、翔子を椅子に座らせた。

「もう、大丈夫だから……」

ジェーンが呆然としているうちに、翔子はだいぶ落ち着いたよう
だ。

「離れても大丈夫ですか？」

シャルナは繋いでいた手をそつと離れた。

「うん、ありがとう」

翔子は少し不安そうに、毛布にくるまった。

シャルナはそつと立ち上がり、運転席までいくと、ジェーンの視界に顔を現した。

ジェーンは先ほどのことからまだ抜けられず、シャルナを無視していた。

「代わりましょうか？」

「……」

運転を代わろうかと尋ねているのだが、ジェーンは返事をしない。これでシャルナに馬術まで備わっていたら、ジェーンにとってたまったものではない。

正体不明の女性が自分よりもできる姿を見てはいられない。

「顔色があまりよくありません。少しでもお休みになられたほうが良いですよ」

シャルナは何もかも見透かすような目でジェーンを見た。

目つきが悪いわけでもなく、かといって優しいわけでもない。

この人には嘘は言えない。

逆らってはいけない。

自然とそう思ってしまう不思議な眼差しだ。

「運転できるのか？」

そんな気持ちからか、ジェーンは声を潜める。

「ええ」

「どうやって覚えたんだ？」

ジェーンはシャルナのことをもっと知りたくなった。

どうしたら強くなれるのか、人の心をどうやって操るのか、知りたくてたまらなくなった。

ジェーンは目をギラつかせてシャルナを見る。

「師匠に教わりました」

シャルナは知っても大したことないという表情で返した。

「師匠ってミケ……何とかって奴か？」

「ミケランド」

シャルナは話し方にあまり感情がなく、なまりもないため、何を考えて話しているのかわかりづらい。

時より見せる笑顔は偽りなのか本音なのかもわからない。

ジェーンにとって最も苦手なタイプだ。

「……」

確かにとても疲れているし、眠りたい。

だが、ジェーンは何と返事をすればいいのかわからなかった。

「私は貴方を信用していますよ」

シャルナはジェーンが自分を信用していないことはわかっている。だが、彼女は彼を信用するしかないのだ。

「俺に会う前、何があっただんだ？」

ジェーンは低い声でそう言うと、シャルナにそつとたずなを渡した。

シャルナは力強くたずなを握りしめ、運転席に腰を掛ける。

ジェーンが座っていた時の温かさ、というよりは、汗で湿っている感触が、背中やお尻にじわっと伝わってきた。

まだ体温が残っているため、そう冷たくは感じないが、背中はずしひんやりとしている。

ジェーンはかなり冷や汗をかいていたようだ。

シャルナはジェーンがそこまで緊張しているとは思っていなかった。なので、これからどう上手く接していけば良いのか考えなくてはならないと思った。

また魔族に襲われたら、協力し合わなくてはならない。

そんな時に互いの関係が良くなければ、翔子どころか、自分の命さえ危なくなってしまう。

だが、彼女はジェーンが自分を利用しようと考えているとは、この時はまだ気づいていなかった。

完璧な人間などいない。

シャルナだって誰の心理も見抜けるわけではない。

その時の口調や表情などから見抜いているだけだ。

心理状態はわかってても、何を考えているかまではつきりとはわからない。

もし、わかる者がいるとすれば、それは――

神様に違いない。

この土地を創ったのも、この世界に命を生み出したのも、神様だ。ジェーンのように神様を信じていない者もいるが、シャルナは信じている。

神様がいないければ、この世界はどうやってできたのかわからない。おそらくそれをジェーンに質問しても答えられないだろう。神様を見た者は誰一人いないのだ。信じない者がいるのは仕方がない。

ただ、シャルナは神様は今も何処かに存在して、自分達を見ている――

そんな気がするのだ。

そして、神様を探しては、出会ってはいけない。何故かはわからないが、そんな気がしてならなかった。

「ショークさんには、この話はしないで下さい」

シャルナは翔子の隣に腰掛けるジェーンに、低めの声で言った。

「あ？ああ……」

ジェーンはシャルナの馬術の腕が気になっていた。

そのためシャルナの言ったことがあまり耳に入ってこなかったのだ、何とも曖昧な返事だ。

シャルナの馬術は見たからには自分と大差はなかそうだったため、表情は緩み、ニヤニヤしている。

「あの、わかりました？」

シャルナはとても不安だったので、少し声のトーンを上げて言った。

これ以上翔子に危険な目に遭ったことを思い出させるのも、遭わせるのも嫌だった。

遭わせないためには、これからはしばらくと言えども一緒にいるジェーンには、話しておかなくてはならないだろう。

「わかってるぜ」

ジェーンは明らかにわかっていないという返事をした。

「何をわかったんですか？」

内心どう思っているのかはわからないが、いつもと変わらない口調で話すところがシャルナの凄いところである。

「ガキを起こさなければいんだろ？」

やはりジェーンはシャルナの言うことは聞いていなかったようだ。

「今から私が話すことを、ショークさんの前では言っただけでなく、ということですよ。ジェーンさんに合う前に何が遭ったのか知りたいんじゃないんですか？」

「もちろん知りたいさ」

まさか本当に話してくれるとは、ジェーンは思っていなかった。

「ショークさんにこれ以上無理をさせたくありません。その為には

守っていたかなくてはいいけません」

シャルナは内心不安だったが、ジェーンのおちゃらけた性格は憎めそうにない。

「カスター村の宿が魔族に襲われました」

シャルナの声はまた低いトーンに戻り、話し始めた。

「危険人物」(前書き)

長い間更新していなくてすみません；；
受験や新しい学校生活に追われていました。
今後は空いた時間に更新していきたいと思います。
宜しくお願いします。

「危険人物」

「マジかよ！あの村に魔族がいたのか！」

「ええ。その理由がどうやらショーコさんのようなのです」

「そいつらの人相は？」

「もう少し声のボリュームを落とさないとショーコさんが目覚めてしまいますよ」

シャルナの話しにあまりに興奮したジェーンは、自然と声のボリュームが上がってしまう。

「わりいな……」

ジェーンはしぶしぶボリュームを落とした。

「二人組で、一人は人間のようでした。ショーコさんとあまり年も変わらないように見えましたね。華奢な青年でした。ショーコさんが森で倒れていたのを私が発見したのですが、その青年に打たれて倒れていたようです」

「もう一人は？」

ジェーンはごくつと唾を飲み込んだ。

早く魔族の話しが聞きたくて仕方がなかった。

「もう一人は……」

シャルナは一瞬言葉を止めた。

もう一人は、ダーカスと名乗った、黒いマントを着た大柄な男だ。そして何よりも、とてつもない魔力を秘めている。

ジェーンがもしもこの男に出会ったら、自分が何を言っても戦おうとするだろうとシャルナは思っていた。

実際、そうなる可能性はかなり高いが、戦ったところで勝ち目は全くと言っていい程ない。

ダーカスが本気で攻撃してれば、足止めする間もなく、塵と化してしまうに違いはない。

シャルナさえも恐れるダーカスの実力は計り知れないものなのだ。

「もう一人も男性で、ダーカスⅡベガと名乗りました。ご存じですか？」

シャルナはジェーンに悟られないように込み上げてきた恐怖を押し殺し、声は更に低いトーンになった。

「聞いたこともねえな。だいたい強い奴は知ってるんだけど……」

「……」

シャルナは言葉が出ない。

「そいつと戦ったのか？」

「……戦ったわけではありません」

シャルナの言葉に緊張が入り交じっているのにジェーンは感づいた。

「その男性、ダーカスはショーコさんを一度捕らえたにも関わらず置いていきました」

シャルナはゆっくりと続ける。

「私はダーカスの気配さえも気が付くことができませんでした。彼の魔力は計り知れません。一瞬のうちに気絶させられてしまいました……」

ジェーンは先ほどとは打って変わり、シャルナを話しを目をまん丸に見開くほど真剣に聞いていた。

シャルナの口調から、どれ程の相手なのかは予想が付く。

「んなやべえ奴が、ガキを狙ってるのか？」

「そのようですね……」

これはますます利用する価値があるとジェーンは思った。

ダーカスを自分が知らなかったことは意外だったが、魔族でおまけに強いことに変わりはない。

「何が目的で狙ってるんだ？」

翔子が狙われる目標がわかればより利用しやすくなる。

「何故かはショーコさん自信もわからないようです。ですが、魔族

と大きく関わっていることは間違いないはずです」

何故翔子が狙われるのか、それはシャルナも、そして翔子自信が一番知りたいはずだろう。

「俺も着いて行っただけか？」

ジェーンは椅子から立ち上がり、シャルナの肩に手を乗せた。シャルナが目線だけでチラリと振り向くと、初めて見るジェーンの真剣な表情があった。

「父親のことと関係が？」

シャルナは肩に触れているジェーンの手は気にせず、目線を戻した。

「俺の人生に関係があるんだ」

おちゃらけていないジェーンの言葉は決意に満ちている。

「鳥よりも危険な目に遭いますよ」

そんなことを聞かなくても、ジェーンの返事はわかっていた。

「いざとなれば命を捨てる覚悟はあるぜ」

ジェーンはシャルナの肩をポンッと軽く叩いた。

「私は構いませんがシヨーコさんは何と言っでしゅうね」

「本当の強さ」

「護衛は二人のほうがいいだろ？」

ジェーンの口調は、いつもの明るさに戻った。
表情からも笑みがこぼれる。

「理由知りたくないのか？」

ジェーンは肩に触れたまま言った。

「理由とは？」

「魔族が嫌いな訳に決まってるだろ」

何故かはだいたい予想は付くが、シャルナは聞くつもりもなかった。

「辛い過去を掘り起こすのは余計に辛くなります」

だからシャルナは翔子に森や宿での出来事を思い出してほしくない。

「……違うな」

「え？」

ジェーンのシャルナの肩に触れる手に力が入る。

「本当に辛いことは忘れられねえよ。どんなに忘れたくてもな」

ジェーンの言葉には熱がこもっている。

まさに自分が、辛い過去を忘れられないとでも言うように……

「じゃあ、私は……」

シャルナと胸にジェーンの言葉が重くのしかかる。

彼女はジェーンの言いたいことはわかるのだが、それを考えてしまつと自分は……

自分は辛い経験をしたことがない。

そういうことになってしまつのだ。

彼女も強くなる為に、たくさん修行をしただろう。

辛いことも必ずあるはずだろう。

いや、実際に辛いことも数え切れないほどあった。

それを乗り越えて、彼女は高い身体能力と観察力を身に付け、様々な剣術や魔法を使いこなせるようになったのだ。

だが、今はそれも乗り越えなくてはならない道として、思い出になつていく。

忘れられないほど辛い記憶――

一体ジェーンは過去に何があつたのだろうか。

翔子やシャルナには想像もつかないほどの出来事があつたのだろう。

ただシャルナにわかること、それはジェーンが過去に想像もつか

ない出来事に遭い、今もそれを引きずっているということだ。

『辛き経験こそ、強者への道である』

どのくらい前だろう。

ミケランドの言葉が、シャルナの頭をよぎった。

その時は言葉の意味がわからなかったが、今ならわかる気がする。

ジェーンは自分よりも遙かに強いということ。

そして自分はまだまだ未熟だということ。

ジェーンならダーカスに立ち向かえるのではないか。

だが、本人はその強さに気が付いていない。

戦いに勝つことが強いだけではないのだ。

シャルナが予想しているであろうこれから起こることは、ジェーンならば、乗り越えることができるのではないだろうか。

「必ず守りましょう。シヨーコさんを」

シャルナはたずなを強く握り締め、まるで自分に言い聞かせているようだった。

「あ、ああ……」

ジェーンはただ返事をするしかできなかった。

何故出会ったばかりの人のために、わざわざ身を危険にさらさなくてはならないのか彼にはわからなかった。

だから、どう考えても、シャルナは魔族の味方としか彼には考えられなかったのだ。

「なあ……」

「何ですか？」

ジェーンはなるべく余計な感情は抑えた。

「いつでもいいけどよ、互いに剣交わさねえか？これから何があるかわからねえし、相手の力量は知っておくべきじゃねえか？」

「……そうですね」

少し間が空いて、シャルナは返事をした。

ジェーンの言うとおり、二人で協力しなければダーカスに太刀打ちするのは不可能だ。

まだお互いに剣を振るう姿は見たことがないので、互いの戦術がわからない。

ただ、二人の剣の腕前はかなりの物のため、お互いそれは理解しているようである。

「楽しみにしてるぜ」

ジェーンは心の底から楽しみだった。

強い者と戦えるのだ。

しかし、専ら彼は本気でやるつもりはなかった。シャルナの剣裁きや癖がわかるだけでよかった。

それに女性相手に本気で戦うなど、彼にとっては不可能なことなのだ。

「じゃあ、俺は寝るぜ」

ジェーンは翔子に氣遣うことなく、腰掛けに寝そべった。

「夜空を見上げて」(前書き)

ここでひとまず一段落。

次からは新たな主人公が登場します。

「夜空を見上げて」

本当は、シャルナにいつ裏切られても良いように、戦略を立てる為に誘ったのだ。

「おやすみなさい……」

シャルナがそう言った頃には、すでにジェーンは冷えきった腰掛けで眠ってしまったていた。

「あらあら……」

シャルナは静かに馬車を止めると、自分のリュックの奥から、薄手の毛布を取り出した。

そつとジェーンにかけると、彼はとても気持ちよさそうな表情になった。

平原の夜はとても冷え込むのだ。

この毛布には、体温を逃がさない魔法がかかっているため、彼は一晩乗り切れるはずだ。

翔子はジェーン専用の分厚い毛布にくるまって気持ちよさそうに眠っているのだから心配ないだろう。

シャルナは静かに馬車を走らせた。

風もとうに止み、平原には馬の小さな足音と、ジェーンのいびきしか響いていない。

夜空には翔子が見たことない星が、それぞれ輝き放っている。

シャルナは時々それを見る。

星を見ると思い出してしまう。

だから、見ないようにしていた。

しかし、夜になるたび探してしまう。
あの人が好きなあの星を……

そして今日も見つけてしまった。
いつもの場所から見るとより遙かに小さい。
だが、見つけてしまうのは何故だろうか。

「もう、忘れようと決めたはず……」

こうして心に刻みつけるのは、いったい何度目になるだろう……

自分はどこにいるのだろうか。

真っ白い空間、そしていつもの真っ白な女性が目の前に立っている。
る。

そして、今回は自分がその女性の前に立っていた。
自分が自分を見下ろしているような感覚だ。

「時は来た。ルイス・マリアルとジョイス・オッドリアを探しなさい」
い」

夢の中で何度も聞いた名前だ。

「その二人はどこにいるの？何で探さないといけないの？」

自分が思っていることを、女性の前の自分は言った。
声も、服も、髪型も異なる点はひとつもない。

「必ずいます。この世界に……」

白い女性は今にも消えてしまいそうな声だった。

「どうしてあたしはここに來たの？」

「それは、自分で見つけるのです。私から話すことはできません」

自分の声は真っ白な空間に響きわたっているが、白い女性の声はまったく響いていない。

耳を澄まさなければ、言葉が聞き取ることが出来ない。

「どうして？何で？何であたしはここに來たの？教えてよ」

翔子は白い女性に質問をぶつける。

「話せないようにされているのです」

「誰に？」

「それも話せません。貴女自身で見つけない限り、方法はないのです。私は二人を見つけないということしか、お話しできることはありません」

「どうやって見つけるの？」

「協力するのです。今の仲間と共に……」

そついうと白い女性の身体が光りだした。

目の前が真っ白になった翔子は反射的に目をつぶった。

まぶたに当たる光から、だんだん視界が見えるようになってきたことがわかる。

翔子はハッと目を開けた。

目の前にシャルナの背中が見えた。

そして隣では、ジェーンがいびきをかき、場所をほぼ占領して眠っていた。

「シャルナさん」

「目が覚めましたか」

「うん」

翔子はジェーンを蹴って、壁の方へ追いやった。

「あたし、夢を見たの」

「夢……ですか」

翔子は先ほどの夢のことを話そうと思っていた。
白い女性が言った

「協力するのです。今の仲間と共に」

という言葉。

シャルナと、仲間と認めたくないが、ジェーンのことだろう。

しかし、ついさっきの出来事のはずが、話そうとすると言葉が出てこない。

話そうとした内容が、頭の中から無くなってしまったようだ。

まるで、何者かに遮られているように……

「あれ？忘れちゃったみたい」

「起きてしまうと夢は忘れてしまうものですよ」

二人は笑っていた。

“この時”は……

次に翔子が同じ夢を見たとき、二人は笑ってなどいられるのだろうか。

その夢が何を意味しているのか、翔子はまだわからなかった。

だが、翔子が次に夢を見るのは、しばらく先のことになるだろう。

シャルナは、地平線からうつすらと光が昇るのを見た。

もうすぐ朝がやってくる。

土の中から小動物達が出てきても、鳥達が鳴き始めても、馬車は走り続けた。

——きつと帰れる。

そう胸に抱きながら。

第2章「知らない場所」（前書き）

ここからは別の主人公サイドです。
魔族がたくさん登場します。

第2章「知らない場所」

ここは何処だろう。

気が付くと、知らない場所にいた。

「どうだ？」

渋く低音の声、真っ黒なマントを羽織った、大柄な男性が言った。

「はい。もう目覚めてもいい頃なんですが」

今度は、華奢で茶髪の白衣を着た男性が言う。

セイラは、再び目をつぶった。

今は、まだ目を開けてはいけない。

マントの男が立ち去るまでは――

「目覚めたら、すぐに連絡するように」

「はい」

マントの男はそう言って、静かに部屋を後にした。
足音がしなかったため、実に不気味だ。

ふうっと白衣の男性は肩を落とす。

余程緊張していたようである。

この人は悪い人じゃない。

そう思ったセイラは、起き上がろうとした。

その時、頭に急激な痛みが走った。

思わず頭を抑えると、何やら堅い機械のようなものをかぶらさせていた。

そこから何本もの管が、どこかに繋がっているようだ。

これが取れない限り、起き上がれそうにない。

自分で外してもいいものだろうか。

すると、白衣の男性はセイラに近づいてきた。

「君は賢い子だね。あの男には近づかないほうがいい」

白衣の男性はセイラの頭の機械をそつと外す。

一瞬、頭がとても軽くなり、宙に浮いているのではないかという感覚にみまわれた。

「無理しないで、ゆっくり起き上がって」

白衣の男性は手を差し伸べる。

セイラがそつと目を開くと、茶髪で短髪、焦げ茶色の目をし、黒縁眼鏡を掛けた、三十代半ばほどの男性が立っていた。

華奢で顔色があまりよくないのは、あのマントの男が原因だろうか。

セイラは彼の手を取り、起き上がることができたが、頭痛は治りそうにない。

「大丈夫。時間が経てば治るから」

セイラは寝ていたベットから起き上がった。まだ一度も白衣の男性から目を離してはいない。

マントの男は魔族だったが、この男性は人間だ。魔力もなく、華奢なため戦闘能力はないだろう。

「誰？」

静かにセイラは言った。

「僕はハリー・クリアス。人間の国では、ちょっとばかり有名な医者だよ」

「あたし、病気なの？」

セイラは怖がってはいなかったものの、警戒した表情でハリーを見つめた。

何故自分はこんな場所にいるのかわからない。

ここに来る前、自分がどこにいたか思いだそうとすると、酷く頭が痛み出す。

「僕に着いてきて」

ハリーはそう言って、静かに部屋の扉を開けた。

廊下は薄暗く、小さな蛍光灯が所々付いているだけだった。

電気が消えかけているものもあり、不気味な雰囲気を感じている。

「何処へ行くの？」

セイラは嫌な予感がした。

行ってはいけない。

またあのマントの男に出くわす気がするのだ。

目覚めてから、頭痛と共に、感が働いているような気がする。何故か自分の思っていることが、本当になる気がした。

「君はここにいちゃいけない。だから別のところへ行くんだよ」

ハリーはそう言って、セイラの手を取った。

「だめ……」

セイラはぎゅっとハリーの手を握った。表情は硬く強ばっている。

「わかってる。でも、このままではいけないから」

ハリーはセイラが何を言おうとしていたのかわかったらしい。しかし、彼は決意に満ちた顔で、セイラの腕を握り返した。

セイラはハリーに手を握られたまま、不安な表情を浮かべていた。ハリーは廊下に顔を出すと、左右をキョロキョロと確かめ、ゆっくりと廊下へ出た。

「さあ、おいで」

セイラはなるべく足音を立てないよう、そつと外に出た。廊下は思ったよりも明るかった。

外から見て初めて気がついたが、部屋の中の方が廊下よりも遙かに不気味な雰囲気を感じていた。

蛍光灯は消えかかり、セイラが寝ていた周りには、大きな水槽がふたつあった。

中には得体の知れない緑色の液体が泡を吹き、たくさんの管がイソギンチャクのようにうねっている。

セイラの頭の中に、ぼんやりと映像が浮かびあがった。

自分はある中にいたのだ。

そして、もうひとつの水槽にいたのは――

セイラは悟った。

その人はもう、いないということ――

セイラのエメラルド色の綺麗な瞳が、涙に溢れ、小さな頬をつたった。

「さあ、急がないと、あの男が来てしまうよ」

ハリーはセイラの気持ちに気がついていたが、ここで立ち話している時間はない。

自分の犯した過ちを嫌というほどわかっているハリーだが、今はセイラをここから連れ出すことが、最優先である。

また、それが過ちを償うひとつの方法なのだ。

「もういいかい？」

ハリーが静かにドアを閉めると、セイラは彼の白衣の裾を掴んだ。

「僕の側を絶対に離れないで」

そう言って、ハリーは部屋から西の方角にゆっくりと歩き始めた。セイラはワンピースの袖で目をこすりながら、ハリーの後ろに隠れるようにして歩いた。

廊下はとても静かで、何の気配も感じない。ふたりの足音だけが響いている。

「誰がいる」

上り階段の所で、セイラは立ち止まった。階段の上から、二人の男の音がする。

「実験台よ、一人は失敗して死んだらしいぜ」

「またか、あのハリー・クリアスって医者もよくやるよな」

「人間はそんなに名誉が大事なのか？」

「さあな。まあ、俺らには理解しがたいことだろうよ」

ハリーは、セイラの手を強く握り直した。

うつむく彼ををセイラはそつとのぞき込む。

「泣いてるの？」

「いや、大丈夫だよ」

今にもこぼれ落ちそうな涙をこらえ、ハリーは微笑んだ。医者が人前で涙を流すわけにはいかない。

こんなに涙をこらえたのは、初めて受け持った患者が亡くなって以来だった。

「誰だ？」

階段の上にいた魔族は二人の会話に気が付いたらしく、階段を下りてくる音が聞こえてくる。

魔族の気配に怖くなったセイラは、ハリーの後ろにさっと身を隠した。

「ああ、あんたか」

魔族は二人共若い男だった。

一人は背丈も体格も普通だが、もう一人はお世辞にもガツチリとは言えないほど太っている。

「どうも」

ハリーは抑揚のない挨拶をした。

後ろにいるセイラを手を力強く握る。

セイラは魔族を見ないように、ハリーの背中に顔を埋めた。

「実験はどうなったんだ？」

普通の男が陽気に言った。

セイラは声を聞かないように、ますます強く顔を埋める。

「あ！」

太った男はセイラに気が付き、ハリーの足下を指さした。

「かわいいねえ。名前は何ていうのかな？」

「……」

太った男は屈んで、似つかわしくない高めのトーンで、セイラに話しかけた。

セイラは男から目をそらし、ハリーにピッタリとしがみつく。

「嫌われてやんのー」

普通の男性はからかうように言った。

ニヤリと笑うと、黒ずみ、金歯だらけでおまけに歯並びも悪い、汚い歯が見える。

「なんだよ！」

太った男はふざけかえして、普通の男の肩を叩いた。

太っているだけあり力も強いのか、本人は軽く叩いたつもりでも、相手は結構痛そうである。

普通の男は痛そうに肩を押さえていた。

太った男はケラケラと笑っていたが、彼の歯はわりと歯並びもよく綺麗である。

よく食べるので、健康に気を使っているのだろうか。

「あの、通してもらえます？」

二人の会話に引き気味のハリーは小さいひ弱な声で言った。

ずっと研究ばかりしていたため、ぶざけるということを知らないのだろう。

「ん？ ああ、いいぜ。実験の結果を報告しに行くんだろ？ その様子じゃ大成功みたいだな」

太った男は笑ったままそう言った。

明らかに自分がどいたほうがいいのだが、普通の男の腕を引っ張った。

「痛えよ！」

普通の男は怒ってブツブツ何か言っていたが、ハリーは無視してセイラを抱き上げ、早足で階段をかけ上っていった。

「待って」

後一段ということで、セイラは急に立ち止まった。

「どうしたんだい？」

「怖い。さっきより嫌な予感がする」

セイラはここに来てから明らかに自分がおかしいことに気が付いていた。

ふと、数分後の光景が頭の中に浮かんでくる。

そして、それが本当になる予感がするのだ。

決して想像の範囲ではない程生々しく、恐ろしい光景だった。

しかし、暗い森の奥深くでは、襲われるまで細身の青年の存在に気が付かなかった。

これは、もしかしたら予知能力なのだろうか。

先ほどの魔族が言っていた『実験』とは、自分に何か関係があるのではないか。

ハリーに聞きたいことはたくさんあるが、今は質問している時間などはない。

彼は、ここから抜け出そうとしている。

きっと魔族が彼を何らか利用したのだろう。

しかし、彼はこのままではいけない。

このまま入り口からまともに外に出れば、彼の命はない。

あの黒いマントの男が外にはいるに違いない。

二人がどう動くか、彼にはわかつている。

何とか他の場所から抜け出さなくては……

「君にはね、予知能力があるんだ」

セイラが自分の能力に気が付いたのを悟ったのか、ハリーはゆつくりと、とても悲しい目をして言った。

「君は未来が見えるんだよ。きつと、入り口から出たら“彼”がいるだろうね。でも、あそこからしか出られないんだ。泥棒に入られないために、窓は作らなかったからね。自分がやったことなのに、いざという時にまんまと利用されるなんて、僕は駄目な男だよ」

ハリーはセイラが止めるのを無視して出入り口へと向かった。一階は外来の待合室になっているため、広いカウンターがあり、フワフワのソファールがいくつも置いてある。

だが、そこにいるのは患者ではない。

背中に槍を背負った魔族達が、今にも死にそうな人間を引きずっ

ている姿があちこち目に付く。

床は深紅に染まっていた。

まだ8歳の少女には衝撃的過ぎる風景なのだった。

セイラはその場に立ちすくみ、動くことができなかった。

誰とも目を合わせようとせず、早足で出入り口に向かうハリーの背中がだんだん遠くなる。

彼はこの光景をどう思っているのか、セイラは気になった。

彼女には彼が好んで実験に協力しているようには思えなかった。

まだ出会って間もないのに、彼はとても悲しい瞳をしていたから……

「……セイラちゃん？」

ふと、我に返ると、目の前にハリーがいた。

彼はその場にしゃがみ込むと、セイラの頭を優しく撫でた。

彼女のサラサラの髪は、ハリーの細長い指を滑らかに通す。

長い間眠っていたせいかな、所々絡まって、綺麗な金色の髪が数本床に落ちた。

「お母さんに会いたい」

セイラは瞳にいっぱい涙を貯めていた。

もう少しでこぼれ落ち、桃色の小さな頬を伝うだろう。

ただこの場所が怖いだけではない。

セイラは、母親は間違はなく、もうここにいない気がしていた。

「君のお母さんは……」

ハリーはセイラの両肩に優しく手を置くと、優しげな瞳は真っ直ぐ彼女を見つめ、柔らかな表情は途端に堅くなった。

セイラはもう何もかもわかっていているというように、ハリーの手を強く握り彼の手を肩から離す。

彼女の手からは『何も言わなくていい』そう伝わってきた。

何も話していないのに伝わったのは、彼女の能力なのだろうか。それとも彼女の母親を思う気持ちの強さからなのだろうか。

「ごめんね」

ハリーはゆっくり立ち上がると、玄関に背を向け、地下へと続く階段へと足を運ぶ。

「戻るの？」

セイラは真っ黒なワンピースの袖で涙を拭った。

「ああ、君もわかっていているんだろう。今はまだここを出る時ではないって」

セイラは黙って深く首を縦に振ると、ハリーの右腕にしがみついた。

「怖いことしない？」

「しないよ。約束する。あの男にも、僕からちゃんと言っておくから」

『あの男の思いどおりにはさせない』

彼はそう心に刻みながら、ゆっくりと地下へと戻っていった。

それでもセイラは心配だった。

もうハリーにあの男と会って欲しくなかった。

彼には自分と同じ力は感じなかったけれど、自分以上に人の心理描写を読むことができる。それを操ることだってできる。

このままではハリーが危ない。

彼は自分を救おうとしてくれているけれど、自分が何とかしなければいけない。

自分が彼を救わなくてはいけない。

地下に戻るまでどれだけハリーが優しい言葉をかけても、セイラにはそのことだけしか頭に浮かばなかった。

だが、たかが八歳のセイラに一体何ができるのだろうか。

正面から立ち向かってハリーもろとも、母親と同じ道を辿るだけだ。

セイラはハリーの実験により、知能は普通の八歳よりも遙かに上回っているが、身体能力は普通の八歳だ。

ここから逃亡する計画を練るには、時間が無さ過ぎだった……

「ふたりの魔族」

あれから一日が過ぎようとしていた。

セイラははじめに寝かされていた部屋ではなく、階段を降りてすぐ手前のハリーの部屋に移された。

薄暗く不気味な雰囲気の実験室とは違い、部屋の中央にフカフカのソファと傷一つ無いガラスのテーブルが清潔で高級感溢れる雰囲気をかもし出している。

奥には木製のベッド、その隣には少し古びた机があり、棚には分厚いたくさんの本が並べられていた。

棚に入り切らず、机の上にも本が数冊積み上げられ、どれも年輪が入っている。

朝目覚めるとハリーの姿はなかった。

ソファで毛布にくるまり眠っていた彼だったが、毛布はソファの端に綺麗に畳まれていた。

セイラはベッドに座り、昨夜ハリーに貰ったおとぎばなしの本に夢中になっていた。

召使いが魔法をかけてもらい、舞踏会で王子様と踊るという、地球でいうシ・デレラのような内容である。

召使いが魔法をかけられ、今から舞踏会へ行こうというところまで読み終えた時だった。

急に嫌な胸騒ぎがした。

胃が雑巾を絞ったようにねじ曲げられたような感覚と、鋭い痛みが頭を走る。

その痛みはだんだん大きくなり、体は痙攣を起こしたように震えはじめる。

本は表紙と裏表紙を表にして、床に落ちた。

シーツをぎゅっと握りしめ、セイラは反射的に布団の中へ潜り込んだ。昨夜はとても心地良く感じた羽毛布団も、今は冷たい。

その中でセイラは耳を塞ぎ、小さくうずくまった。呼吸は乱れ、滴り落ちる冷や汗が、乾いたシーツを湿らせた。

次々と浮かび上がるもうすぐ起こる出来事を、頭を横に振り忘れるようにするが、すればするほどますます未来が脳裏をよぎる。

セイラがシーツにぎゅっと顔を埋めた時だった。静かに扉の開く音が聞こえてきた。

「何を怯えている」

低い男の声がしたが、セイラはその場を動かない。

「本当に人間の考えていることはわからんな」

ダーカスは毛布にそっと手をかけると、セイラをくるんだまま、マントに隠すように抱き上げた。

「きゃっ!」

セイラは毛布を強く掴んだ。
大粒の涙が溢れだしてくる。

今怖い目にあっているのももちろんだが、これから自分がされることを考えた方がもっと怖かった。

「うっうっ……」

恐怖にかられ、声を上げることもままならない。
今はダーカスに従うしかなかった。

ダーカスは部屋を出ると足早に奥へと進んでいく。
また最初にいた部屋に連れて行かれるのだろう。

「ここで待て」

ダーカスは最初にいた部屋の向かい側の部屋の前で立ち止まった。
ゆっくりドアノブを回し、少しだけ扉を引いた。

「自分の運命はわかっているのだろう」

ダーカスはセイラを下ろすと彼女の背中を軽く押した。

セイラは少しよろめくと、前方へ倒れ、部屋の中に転がり込んだ。

すぐに扉を閉め鍵をかけると、彼は向かい側の部屋へと入っていた。
った。

部屋の中は真っ暗だ。

ただ、その部屋の中にいるのはセイラ一人だけではない。

ぎよろりと大きく、焦点を失った瞳が二つ、薄気味悪く黄緑色に光っている。その得体の知れない生き物はキーッと鼓膜を貫くような声で鳴いていた。

瞳の直径だけでもセイラの身長程あるため、そうとう巨大な生物である。

セイラは声も出せず、小さな額から冷や汗が滴り落ちた。彼女が後ずさりをするわずかな音にも反応し、得体の知れない巨大な生物は、セイラをじっと見つめている。

焦点が合っていないため、とても気味が悪い。

なるべく見ないようにしよう。そう思い顔を背けようとした時、急に身体が宙に浮いた。正確には浮いたのではなく、持ち上げられたのである。

自分の両側に見知らぬ男が二人、腕を掴んでいた。簡単に逃げられないようにするためか、そうとう強く握っているらしく、腕が痛い。

肩が外れそうな感じがした。

セイラがそれに気が付いたときには、既に部屋は明るくなっていた。

得体の知れない生物は、鳥だった。

ただ普通の鳥とは明らかに違う。

人間の世界では見ることもない、眩しくなる程鮮やかなオレンジ色をしていた。

生まれたばかりのひなのように大きく飛び出た黄緑色の瞳と、フラミンゴのように長い脚、鶴のように長い首、オウムのように大

きなクチバシを持った鳥は、とてつもなく大きい。

そう、ラース平原で翔子達を襲った、あの鳥である。だが、あの時シャルナが倒したはずなのに何故……

部屋は人が四人立っているのも精一杯で、セイラの視界は鳥の不気味な顔で埋め尽くされていた。

セイラは気分が悪くなり、収まりかけていた頭痛も痛みを増してきた。

この後起こる未来が、彼女の脳裏を、凄まじい速さで駆け巡っていく。

この部屋にいるのは自分と鳥だけではない。
この鳥の死角に誰かがいることを――

「ハリー？」

セイラは今にもこぼれ落ちそうなほど、目に涙を溜めて彼の名を呼んだ。

鳥の羽根の死角から、細長い影が現れた。そつと顔を上げると、真っ赤に染まった白衣を着たハリーがゆっくりと顔を覗かせた。

手には注射やハサミのようなものを持ち、はめている手袋も真っ赤に染まっており、血は床に滴り落ちている。

「……じゅ、ごめんね」

ハリーは今にも消えそうな声で言った。白衣の血は巨大な鳥のものではない。ハリーのものだ。

またふと頭に痛みが走り、セイラは辺りを見回した。

今まで気がつかなかったが、状況は悲惨極まりない。昨夜玄關で見たような状況が部屋中に広がっていた。巨大な鳥ばかり気にしていたため、気が付く余裕などなかったのだ。

手足がない、性格には手足がもげた魔族があちらこちらに倒れている。壁には血がこすれた後が広がっていた。

「君が必要なんだよ……」

ハリーは衰弱した顔で微笑んだ。

嫌だとセイラが言葉を発しようとした時だった。

「お喋りは無用だ」

セイラの左側にいる、長身の男が言った。肩まである深緑の髪はウェーブがかっている。そして純血の魔族の証でもある、紅の瞳をしていた。純血の魔族とは、先祖に魔族以外の血が混ざっていない者のことを指す。

ちなみに純血の人間は金色の髪に、爽やかな蒼い瞳をしているという。つまり、ジェーンやセイラのことを指す。

「しかしフォール様、このハリーという人間はかなり弱っていますよ。大丈夫でしょうか？」

今度はセイラの右側の男が言った。フォールと呼ばれた長身の男よりは背は低い、決して小さくはない。肩幅が広く、所々筋肉が目立ち、服は少しくつそうである。太っているわけではなく、筋肉質な体格のためである。坊主のため髪の色はわからないが、紺色の珍しい瞳をしていた。

「仕事をこなせるくらいの体力はあるだろう」

「しかし、死んでしまったらこの先……」

「よく考えるグランド。成功例があれば後は同じことをするだけだ。我等魔族はそこまで落ちたか？」

「失礼致しました。今の言葉、撤回させて頂きます」

坊主の男はグランドというらしい。フォールは無精髭を生やし、顔からもわりと歳なのが感じられるが、グランドはハリーよりも少し若そうである。

二人共冷静な口調で淡々と話している。その口調や雰囲気から、かなりの大物であることがわかる。セイラは特にフォールから、ダーカスと同じオーラを感じた。

「歩けるか？」

フォールはハリーに向かって言った。その言葉には、何の感情も込められていない。まさにダーカスと同じである。ただ、ダーカスよりも声が明るいため、それほど冷たくは聞こえない。

ハリーは何も言わず、脚を引きずってこちらに向かってきた。今にも転倒しそうである。

「だめだよ。だめ……」

セイラは泣きながらハリーに訴えたが、彼はもう聞こえているのかどうかわからないほど衰弱しきった瞳で、こちらに向かって来る。

「やめさせてよお！」

セイラは泣き叫んだ。自分が何かされることももちろん怖い。だが、弱り果ててまでこちらに向かつて来るハリーを見るのはもっと辛かった。

グランドは泣きじゃくるセイラをそっと見ていた。小さな女の子が苦しむ姿を見るのが辛いのだろうか。だが、決して顔に出してはいけないと彼はわかっている。これも自分に与えられた、使命の一つなのだ。

グランドは軽くまぶたを閉じ、ゆっくりと息を吐き出した。

そのグランドをフォールは横目でちらりと見た。だが何も言わず、すぐに視線をハリーに戻すと、セイラを掴む手に少しだけ力を込めた。

——その時だった。

「そのお部屋に入られてはなりません！」

扉の外から見張りの声が聞こえてきた。もう一人、若い青年の声が聞こえてくる。

「やめさせなくちゃいけないんだ！」

その声と共に、ドンドンと扉を叩く音がする。しかし、扉はピクリとも動かない。

「私が行きます」

グラントは廊下の様子を見ようと、セイラから手を離そうとした。

「いや、私が行く。グラントは少女と医者を見てやってくれ」

フォールがハリーに視線を向けると、ハリーが自分達まで後数歩というところで倒れていた。グラントが廊下の声に気を取られている間に力尽きたようだ。

「わかりました」

グラントは

「ごめんよ」と優しくセイラに言い手を離れた。

セイラは真っ先にハリー駆け寄り身体を揺さぶった。

「死なないでよぉ！」

「大丈夫。今から俺が見るよ」

グラントはセイラを刺激しないように、ゆっくりと近寄った。セイラはハリーにしがみつき、グラントの様子をじっと見ている。

「ハリーを助けるの？」

「そうだよ」

グラントは自分の顔だけでセイラが怖がるのではないかと思い、必死で笑顔を作ってみせる。筋肉質で坊主頭、いかつい顔のグラントは、普通に立っているだけで、大人の男性さえも、うかつに近寄

りがたい容姿をしていたからだ。

「あなた、ほんとに悪い人じゃない。でもまたハリーが苦しい目に遭う」

セイラは身体をいっぱい使ってハリーに触れさせないようにしている。

「だけど、放っておいたら彼は死んでしまうかもしれないよ」

その言葉を聞いて、セイラはハリーの顔を見た。目の下には大きなくまができ、頬はこけ始めている。堅く閉ざされた瞳はピクリとも動く気配はない。大怪我をしているため、額にはえぐられたような傷があった。

「わかった。でもハリーに何かしたら許さない。わたし、ちゃんと見てるから」

セイラはワンピースの袖で涙を拭くと、グランドを真っ直ぐ見つめて言った。その瞳にはさっきまでの死んだような目ではなく、しっかりとした決意が込められていた。

「怪我を見るだけだよ」

グランドはハリーの右側に座り込むと彼を仰向きにさせ、服を脱がせ、傷を見始めた。

セイラはグランドの一つ一つの行動を見逃すことなく見続けた。一方で、フォールは扉の前に行くと、すぐに扉は開けず聞こえてくる声に耳を傾けた。

「中には誰もいないの？」

「自分は何も存じておりません。だいたいどうやってここまで来られたのですか？」

『シャオ様か……』扉の外にいるのが誰か検討のついたフォールは、ゆっくりとドアノブを引いた。

「ふお、フォール様。何故あなたまでここに？」

フォールに気が付いたのは声の主よりも見張りの方が早かった。

「魔獣が手に負えないと連絡が入ったのでね。それよりも……」

フォールは自分のすぐ手前で啞然として立っている、一人の若い青年に視線を向けた。

「フォール！ あ、いや先生。どうしてここに？」

青年はいたずらが見つかったようなごまかしの微笑みを作っている。真っ黒な髪はサラサラで顎の辺りまで伸び、魔族の純血の証、フォールと同じ深紅の瞳をしている。

「それはこちらが先に言うセリフです」

フォールは全く表情を変えずに言った。

「父さんは間違ってる！」

青年のふざけた表情は途端に何かを訴えるような、真剣な顔へ

と変わっていた。

「中で何をやってるの？」

青年はフォールを振り払い、部屋の中を見ようとした。それをフォールは片手で意図も簡単に抑えてしまう。

「悪いことしてるんだな！」

青年はめげることなく、廊下いっぱいに響く声でそう言つと、フォールの腕の中で暴れまくった。だが、フォールはびくともしていいない。

「大人の話しに首を突っ込むなと言つたはず」

フォールは廊下へ出て扉を閉めると、青年を解放した。

青年はまたも扉へ向かう姿勢を見せたが、扉の前にはフォールが立ちはだかっているため、部屋の様子を伺うのは不可能だった。

「どうやってここへ？」

声のトーンを下げてフォールは言った。

「後を追ってきた」

フォールの顔がひきつっているのを見て、青年はすぐさま答える。

「誰の後を？」

「この前、魔の国に来た男の人だよ」

それを聞いてフォールの顔が激しく歪んだ。

「シャオ様を見てくれ」

フォールは見張りにそう言って、部屋の中に戻った。シャオと呼ばれた青年は

「開けるー！」と大声を張り上げて扉をバンバン叩いていたが、見張り以外はそのことはもう全く気にしなかった。

「医者容態は？」

フォールはグランドに訪ねた。グランドがハリーの傷口に手を当てると、彼の手から柔らかな白い光がふつと灯り、ハリーの傷口を塞いだ。

その様子を、セイラは何一つ見逃すことなく見つめていた。

「命に別状はありません」

グランドは安心したのか、肩を落とす。セイラの顔からも小さな笑みがこぼれた。

「後はこの部屋の処理だけ」

グランドはそう言って両手を挙げると、さっきと同じような柔らかな白い光が部屋中を包み込んだ。あまりの美しさにセイラは見とれていると、辺り一面光に包まれて、自分もその中にいるような感覚になった。

もう廊下の声も聞こえない……

ふと我に返ったときには、血の跡も死体も綺麗さっぱり無くなっていた。ダーカスが宿で使った呪文と同じことを、グランドはしたのである。

廊下からはまだシャオと見張りのやりとりが聞こえてくるが、少しだけ小さくなった気がした。

「ところで、君はどこから来たんだい？」

強い魔力を使ったため疲れたのか、腕で額の汗を拭いながらグランドは言った。

「言いたくない」

セイラは小さく首を横に振る。

「そうか、ごめんね」

グランドは何となくセイラがどこからどうやってここにやってきたのかわかってはいたが、セイラの悲しみに溢れた顔を見て、深く追求することはしなかった。

「グランド、お喋りはその辺にしておこう」

二人を全く気遣うことなくフォールは言った。

「これからどうするのです？」

ふと我に返ったグランドは、優しい表情から緊張感漂う表情へと変わっていった。

「あの男のところへ行く」

「あの男って、ダーカスとかいう？」

「ああ」

セイラはグランドの表情がたちまち強張っていくのがわかった。霧囲気だけで、かなりのやり手だとわかるグランドがこうなるのだから、ダーカスはよほど恐ろしい人物なのだろうということを、セイラは改めて認識した。

「この子は？ あの鳥は？ 医者は何？ どうするのですか？」

グランドは強張った表情のまま、ハリーとセイラを氣遣っている。

「当てがある。医者と少女を廊下へ出そう」

フォールはそれだけ言って、さっさと廊下へ出ていった。

シャオは部屋に入るのは諦めたようだが、部屋の扉の前にしゃがみ込んで、相変わらず見張りの兵士を困らせていた。見張りはフォールにすぐに気が付き敬礼すると

「今度は何か？」と緊張した様子で訪ねた。

「またこの子に用があつてね」

フォールはシャオへ視線を向けた。

シャオはすぐ真後ろの扉が開いたにも関わらず、完全にいじけていて気が付いていない。

「シャオ」

フォールは内心呆れながらシャオの名を呼んだ。

「フォール！ 今度は何なんだよ！」

シャオは気分の悪そうな顔で振り向いたが、出てきたのがフォールだとわかると、途端に立ち上がり大声を張り上げた。

フォールはシャオが完全に振り向くより早く部屋の扉を閉めた。

「頼みがある。人助けしないか？」

「え？ だ、誰を？」

フォールがゆっくりとドアノブを回すとセイラと手を繋ぎ、ハリーを背負ったグランドが現れた。

シャオはちらりと部屋の奥を覗いたが、電気が消されていたため真っ暗で何も見えなかった。

そしてハリーとセイラの存在に気付くと、目をまん丸くして呆然としていた。

シャオにとつて人間を見るのは初めてなのだ。

写真や絵では見たことがあったが、実際に見たことはない。

「この方々は人間だ。我々は今からお前が追ってきた男のところへ行く。その間側に着いてやって欲しい」

「……わかったよ。その男の人は大丈夫なの？」

「命に別状はない」

シャオは不安だが断り切れなさそうな顔をして、渋々うなずいていた。

「こちらのお部屋が空いておりますが」

見張りの兵士は研究室の正面の部屋の扉を開けた。
中にはベッドが2つ置いてあり、休むにはちょうどよさそうだ。

「いや、地下は駄目だ。1階にしてくれ」

「はっ！ 今すぐ調べて参ります」

フォールの命令で見張りの兵がいなくなると、フォールはグランドからハリーを担ぎ上げ、冷たい床に寝かせた。

「私の声が聞こえるか？」

ハリーの意識を取り戻させようとするフォールを、セイラは心配そうに見つめていた。

「手の施しようがないな。どうする？ グランド」

ハリーがいなければ安全な部屋はわからない。
見張りの兵士に気づかれてしまったら、シャオとハリー、セイラの命が危なくなってしまう。

セイラはフォールが自分達の安全を考えていてくれるのはわかったが、彼もダーカスと同じ魔族である。

同じ魔族でありながら、彼はダーカスを良くは思っていないようである。

それが何故だかセイラには不思議でなかった。

「彼等の理由」

それから誰も言葉を発せず、ひんやりと冷たい空気が流れていた。セイラ、シャオ、フォール、グランドの四人は、ハリーの意識が戻るのを黙って待っていた。

フォールはこのまま待っていては見張りが戻ってきてしまうので、グランドを残して自分だけでダーカスのところへ行くつもりだった。

しかしセイラは嫌な予感がしていた。

フォールもとてつもない力があることは十分承知しているが、今ダーカスのところへ行つては、彼も危険な予感がした。

魔族を助けるつもりはないが、万が一のことが起こっては罪悪感が残るので、

「ハリーの意識はもうすぐ戻るわ」

と言うと、彼女の言うことを信じたかどうかはわからないが、フォールは黙ってその場に止まった。

しかし、一向にハリーの意識が戻る気配はなかった。

見張りが一階を見に行つてから、もう数分が経つ。

そろそろ戻ってくる頃だろう。

「戻ってくる！」

セイラがそういうと、階段を下りる音が聞こえてきた。

「君、何でわかるの？」

シャオは状況を把握できておらず、見張りが戻ってくることよりも、セイラの“堪”に驚きを隠せなかった。

「……仕方ないな」

フォールは呟くようにそう言い、視線をグランドに向けた。そしてグランドは、黙って階段の方に向かう。

「ちょっと！ フォール！」

やっと状況に気が付いたシャオは、フォールにグランドを止めるように言ったが、もう遅かった。

階段の方から一瞬甲高い悲鳴が上がると共に、鈍い何かが倒れ落ちるような音が聞こえてきた。

セイラは耳を塞ぎ、しゃがみ込み、シャオは啞然と階段の方角を見ていた。フォールのみが何事もなかったかのように平然としている。

「この者、どうされますか？」

グランドは傷ひとつなく、何事もないように、背中に先程の見張りの兵士を背負っていた。

「こっちの部屋に寝かせておこう」

フォールは巨大な鳥のいる研究室にの前の扉を開けた。

グランドは兵士を背中に抱えたまま中に入り、電気をつけずにベッドに兵士を丁寧寝かせた。

目覚めてももうこの兵士は何もしないだろうと思い、グランドもフォールも鍵をかけなかった。

あくまで同族に対する信頼と礼儀である。

「僕はどうしたらいいのさ」

状況をやっとな理解したシャオは口を開いた。

セイラは三人が敵なのか、見方なのか理解しがたく、未だ警戒を払っている。

「その二人の側に付いていなさいとさっき言ったが……」

「どこにいればいいの？」

「それは、その少女に聞いてみるといい」

フォールはセイラに視線を向けた後、それ以上何も言わずにシャオに背を向け静かに階段へと向かう。

グランドもそれに付いて行った。

廊下に残されたのは、どうしたらいいのかわからず、途方に暮れているシャオと、警戒を解かず、不安と恐怖でガチガチに緊張しているセイラ、グランドの魔法により怪我は治ったものの、まだ意識は戻らないハリーの三人だった。

シーンとした空気が張りつめていた。

意識のないハリーは仕方がないが、セイラもシャオも言葉を発しようとはしなかった。

シャオは視線をセイラに向ける。

小さいながら、セイラはシャオを探るように見つめていた。

「君は、ここから出たいんだよね？」

シャオはそつと訪ねる。

「……うん」

少し間が空いて、小さな声でセイラが答える。

彼女には、何がどうなっているのかわからなかった。

フォールとグランドは、明らかにダーカスをよく思っていない。

下手をすれば戦いにならざるおえないことを、彼女の堪が物語る。

あのふたりは何がしたいのだろうか。

それに巨大な鳥のことも、セイラのことにも、興味などなさそうだった。

おそらく自分を逃がしてくれたのだろう。

シャオはダーカスを知らないであろうし、何が起きているのかも理解していないだろう。

「怖いことされた？」

彼は何もしていないのに、何だか申し訳なさそうな様子である。

「うん。でもさっきのふたりは関係ないよ」

今度ははっきりとセイラは言った。

「うん、あの二人は見た目は怖いかもしれないけど、本当はいい人達なんだ。僕と一緒に表に出よう」

シャオは笑顔でセイラの手を取る。

「僕はシャオ。君は？」

「セイラ」

セイラは笑顔は作らなかったものの、シャオへの警戒は解けたようである。

シャオはハリーを重そうに担ぎ上げると、一段一段ゆっくりと階段を上っていく。

玄関ホールまで出ると、前にいた兵士と血まみれの人間の姿はなく、誰もいる気配がない。

天井のシャンデリアとソファアが、不気味な程に目立っているだけだった。シャオはハリーを担いで限界にきたのか、呼吸が荒い。だが、着々と玄関の扉に足を運んでいた。

「玄関から出るの？」

突然シャオの手を握り締め、セイラが言った。
とても不安な様子である。

「そのつもりだけど……」

「駄目。これは罠だよ」

「……じゃあ、どこから出ろっていうのさ」

セイラの年齢にそぐわないあまりに真剣な表情と、不安な様子から、シャオは彼女の意見を否定しなかった。

ただ、彼はダーカスを知らない。

一体誰の罠なのか、何故フォールやグランドまでが動かなくては

ならないのかわからなかった。

彼等は魔族の中でもより魔力が強く、精神的にも優れた能力を備えた優秀な騎士なのだ。

「裏口。ハリーが秘密に作った部屋があるの」

「本当に？ 案内してよ」

「……」

セイラの言葉はここで途切れてしまった。
彼女は申し訳なさそうにうつむいている。

「どうしたの？」

「ごめんなさい。場所は知らない。ハリーが前に話してただけなの」

シャオはため息を漏らし、やれやれといった様子だった。
ハリーを抱える肩の力が抜け、ハリーはゆっくりズレ落ちる。「
もう僕、これ以上彼を抱えて歩けないよ」

シャオは床に膝を付いた。

やっぱり自分だけでは駄目なんだ。

誰かいなくちゃ何も出来ない。

一人では何も出来ないんだ。

そう、いつも自分の側には誰かがいた。

フォール、グランド。

パルクにパープワ。

そして母親。

父親と兄は嫌いだが、母親と家来達は皆大好きだった。

寂しいとき、辛いとき、いつも側にいてくれた。

どんなことでも嫌な顔ひとつせず聞いてくれたし、秘密は必ず守ってくれる。

時には自分のためになら、厳しいことだって言ってくれる。

こんなに大切な人達がいて自分は守られているのに、人間二人、ましてや子どもを助けることができないんで、こんなに惨めなことがあるうか。

自分は魔族なんだ。

魔力がなくても、魔の国の王子なんだ。

シャオは自分にそう言い聞かせ、もう一度ハリーを担ぎ上げる。不思議とさつきより少し軽いように感じる。

「じゃあ、その秘密の出口とやらを探そっか」

シャオの顔に笑顔が戻った。

セイラは自然と大きくうなずいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2918b/>

Fate of Time ~ 運命の扉 ~

2010年10月10日00時23分発行